ＧｏｄＥａｔｅｒＳｔｒｉｋｅｒｓ

秋永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＧｏｄＥａｔｅｒＳｔｒｉｋｅｒｓ

【Ｎコード】

Ｎ７２２８Ｊ

【作者名】

秋永

【あらすじ】

世界には、滅びが蔓延していた…そんあ世界で戦っていた新入りの戦士は、突如魔法が普及する世界に飛ばされてしまう…

彼は、この世界で何を『喰らう』？

プロローグ―神喰い（前書き）

どうも、Wを書いているひとです。
正直最近、Wに一種の技量的『限界』を感じてしまい
経験値を積むべきと考え、今回の作品を書くことを決断しました。

ちょうど、うp主もやっているゲームだしやりやすいかなと思ってたり…なかったり…

ちょっとの間の練習にお付き合い下さい（m＿＿）m

プロローグ―神喰い

西暦２０６５年…

人類は個で一つの単細胞生物『オラクル細胞』と『コア』と呼ばれる器官を持つ
新種の生命体…
『荒神（アラガミ）』により絶滅の危機に立っていた…

荒神の持つオラクル細胞は、貪欲に辺りの物体を『捕喰』する為、既存の兵器は効かず、彼等の進化を生み出すだけに終わっていた…

人類はこれらに対抗すべく、武器に荒神の持つオラクル細胞を埋め込まれた武器…『神器』と、それを扱う兵器『ゴッドイーター』を生み出した

ゴッドイーターは、オラクル細胞とそれに適合する人間との融合により生まれる『兵器』である…
その力は人によっては、一騎当千…まさに悪魔のような力を持つ

これは、神が人になるか…人が神になるかの競争から弾き出され、必死に戻ろうとする話である…

―――――――――――――――――――――――――

「サクヤっ！アリサを連れてアナグラに戻れっ！！」

「ソーマっ！退路を開けっ！！」

「サクヤっ！全員の統率をっ！！」

贖罪の街と呼ばれるフィールドで、リンドウ達は、白い女性のような顔を持つアラガミに囲まれていた…しかし、へそ出しルックのアリサが突如、『何か』をし、リンドウと新型神器使い、アリサとコウタにサクヤにソーマとで二つに分断されてしまった…
二つ組を分断するのは瓦礫…リンドウ達には退路が無く、アリサ達にはある…二つの差はこれだけにある…

「新入り…案外不幸だったな…ここが俺らの墓ｂ「んな訳あるかよ…」…」

「俺達は死なない…生きていれば何とかなる、あんたの言葉だろうが。」

「言うようになったじゃねぇか…」

二人は背中合わせになり、荒神達に神器を向ける…お互いの背中が汗が噴き出ているのを感じる…

「新入り…やれるか？」

「１：９でいい、勿論、俺が９な。」

「いいねぇ、嫌いじゃないぞ…その感じ。」

新入りの男は不適に笑い、神器を下段に構え直す…その行為自体、切羽詰まった自分をごまかす為にしているのだ

「この尻に火を付けられた感覚、敵を蹴散らしたら…たまらねぇよ、オイ。」

「大形、お前も狂って来たな…」

「狂って来たついでに、耳寄りな情報だよ…隊長。」

「なんだ…新入り？」

リンドウは、背中合わせの部下に問いかける…

「ちょっと、無双してくる…その間に逃げてくれ…何、頃合い見て遁走するさ。」

新入りは、リンドウの耳元に顔を近づけ、やる事を告げる

「承知したくないが、わかった…退路はどうする？」

「こうするっ！！」

異形の大剣…ロングソードを構え、力を溜める…剣のコアから何本もの黒い線が右手の赤いコネクタの穴に入り込む

男の体から黒い霧が立ち上り、体を包む…

『荒神…覚醒…』

男の姿は、黒い甲冑姿になる…鋭角的な姿で、触れるものは全て壊してしまいそうである

首元から尻尾のような物が伸び、頭の兜からは紫電のようなたてがみが伸びる

その姿は破壊者…荒ぶる武神のようであった

「お前…」

『すんません、後お願いします…』

黒き武神は跳躍する…敵が待つ戦場へ

―――――――――――――――――――――――――

戦いはほぼ一方的であった…荒神達が迫った瞬間には、両手から出る巨大な口で『捕喰』していく…コアを的確に失っていく荒神達は、オラクル細胞の結合が出来なくなり霧散していく…その姿は、まさに一騎当千、自らの軍門に下らない愚者を制裁する魔神のようであった

『グォォオオオ！！！！！！』

「完全に化け物と化してやがるっ！あの馬鹿っ！」

首から伸びる触手に手をかけ、そのまま引きちぎる

触手は、男が大剣程の大きさに膨れ上がり、魔神の剣『神触剣タキリ』のようになる

魔神は、剣を振り回し尚も破壊行動を繰り返す…本人が危惧していた現象…暴走…『荒神覚醒』は、活性化したオラクル細胞と神器のコアが精神を蝕み、担い手を荒ぶる神へとしてしまう禁じ手である

新型というより、オラクル細胞と自信の神器のコアとのシンクロ率が高いからこそ出来る事…しかし、それはミイラ取りがミイラになる行為と全く同じ事であったが

『グルルルゥゥゥ…』

『グガァァァ！！』

もはや、畜生同士の戦いとなっていた…しかし、相手の黒いライオン…堕天ヴァジュラは、あまりにも異常な相手に遁走してしまった

「嘘だろおい…マジかよ。」

「最悪ね…榊博士が言っていた荒神人間って、冗談じゃなかったのね…」

「人が人を裁くか…悪趣味だな。」

余裕を見せるベテラン三人だが、新人のコウタは戦意喪失では無いが戦うより逃げる事ばかり考え、アリサはここにいない誰かに謝っている

『グゥゥ…』

「まいったな…向こうさん、俺を指名みたいだ…」

「リンドウ…」

魔神は、リンドウをただじっとみ、剣を突きをする姿勢で構える

「必ず、かえって来てね…」

「安心しろ…逃げるのは得意だ。」

それに、あの馬鹿を起こさなきゃなと良いながら剣を構えなおす…逃げることは許されないだろう、相手は、確実にこちらを殲滅するだけの力があり、楽しむ為にこちらに剣を向けている

「さぁて、いっちょやりますか…覚悟はいいな？坊主！！」

『グオォォォォオオオ！！！！』

「おい、空気読めよ…」

さあ、ようやく戦おうって時にリンドウの相手の後ろから黒いヴァジュラが相手に噛み付き、右手を食いちぎる
食いちぎった手を租借しながらヴァジュラは距離をとる…荒神に恐れられる怪物とはなんだろうかと考えながら、リンドウは考えていた…今回のミッションはイレギュラーが多すぎると

『…死ね。』

ただ、その一言をしゃべり、怪物はヴァジュラを一刀両断する…まるで好物をお預けされた子供のように荒れていた

「さて、次は俺のようだが…良いのかい？左手ないぞ？」

『…』

できれば見逃してほしいな、なんて考えながら隙を消したいく…今は、仲間達をアナグラの確実に帰すのが今回の目標…か

「さて、みんないないし…元に戻ったらどうなんだ…」

『ごめん…』

黒い甲殻が霧散し、それは男の手に収まり、神器となる

「これから、どうする？」

「正直、…？」

「…どうした？」

リンドウが、男の様子から察したのか警戒を強める…リンドウの後ろには大きな黒い触手のような『ナニカ』がいた…それは、こちらにまっすぐに向かってくる

「危ないっ！！」

「うおっ？！」

男がリンドウを庇い、触手に飲まれる…この時、男の存在をこの世界から消えた

『お前の存在は危険過ぎる…』

男が聞いた、それが最後の一言だった

ここは、ミッドチルダと呼ばれる世界

場所は人が住む首都から離れた郊外である

「ここに、次元震の反応が？」

《そうです…気をつけて、なのはちゃん。》

「大丈夫だよ…反応自体は収まってるし、現場のデータ採取が目的でしょ？」

《せやけど…そんな事言ってまた》

「う…き、気をつけるよ。」

仕事の鬼…兼、管理局の白い悪魔と呼ばれる女性…高町　なのはは、とある事件現場
に来ていた
本当は、彼女クラスの魔道士が動くような事件ではないが、如何せん休むというコマンドが頭から失っている彼女は、こういった危険度の低い職務を定期的に回し、疲労が極力溜まらないようにしているのだ
会話の相手は、八神　はやて…今年、機動六課と言う新部隊の部隊長を務める所詮、エリートと言う名の仕事廃人である

「現場に到着…特に異常は…まって。」

《どないしたん？》

「誰か倒れてる…」

《気をつけてな…罠かもしれんよ。》

「うん。」

なのはは、倒れた人物に近寄る…手には黒いラインの入った赤い腕輪をしており
黒いジャケットに赤いシャツ、黒いネクタイをし、へそだしファッションである
ズボンは、ゆったりとした黒いパンツに同色の軍用のようなブーツを履いていた
変わっていたのは、ジャケットの左の袖が千切れて無くなっていた事ぐらいか

「見た目は、17歳くらいの男性、白髪で赤い腕輪が特徴的かな。」

《わかった、今救護班を…》

「まって、様子がおかしい…」

男の寝ている金属の床が徐々に消えていき、変わりに男の傷が癒えていく
触れようとしたなのはのバリアジャケットの手袋の指先の無くなっている

「これは…」

『そこな女性…』

「ふぇ?!」

野太い男性の声が突如なのは達のいる廃墟に響き渡る…

なのははその音源を捜すが見つからない
男性は気絶したまま起きなく、声を出しそうな物は男性の持つ剣のような何かだけだ

『今、相棒は偏食因子がちといかれているんだ…簡単に衝撃を与えて起こしてくれないか？』

「起こすたって、その人に触れようとして指の皮が無くなったのだけど…」

『だったら、鉄パイプを投げてくれ。オラクル細胞の回復も早まって一石二鳥だ。』

「そんな危ないことできませんっ！！」

声の主は未だにわからないが、少なくても敵ではなさそうだ

「だったら、アクセルシューターくらいなら…」

『おい、なにをすｒ』

「アクセルシューター！！」

なのはの持つ得意な魔法でも低威力（本人基準）のこれならと容赦なく撃ち込む…が

「うそ…」

《なのはちゃん、なにが起きたんや！！》

「わからない…ただ、もう…」

《すぐ行く！！》

ついでに仕事もブッチやとはりっきて飛び出すはやてだった

―――――――――――――――――――――――――

彼は、ミッドチルダの局立の中央病院に搬送された
剣は、現在『尋問』を受けている…見た目は中々凶悪だが
素直で良い奴と尋問官受けがよかったようだ…が、トラウマ
が増えたらしい
なんでも、冗談で出したカツ丼を黒い大きな口で食べたらしい
…器ごと

「やはり、彼は予言のさす者なのでしょうか？」

「わかりません…彼自身から話を聞かないことには。」

暗い西洋風の客間で、金髪のグラマラスな女性とはやてが映像を
見ながら
話をしていた

「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の下、聖地より
かの翼が蘇る。

死者達が踊り、なかつ大地の法の塔はむなしく焼け落ち、

それを先駆けに数多の海を守る法の船もくだけ落ちる…」

「そして、つい最近追加された部分がこれです。」

「何々…なんや、これ…」

「まだ、ちゃんとした意訳もできてないからなんとも言えないけど…これは。」

羊皮紙にこう、記されていた…

神を喰らうもの、黒き鎧に身を纏い、双月に浮かぶ死者の棺を切り落とさん

プロローグ―神喰い（後書き）

これで少し、ゴッドイーターに興味をもっていただけたら幸い…
べ、別に布教用の小説じゃないんだからねっ！！（きめぇ

とりあえず、本格的執筆はＷＡ'ｓが終わってからになりそう…
いや、最悪こっちけすかも…ｏｒｚ

プロローグ2 - 捕喰者（前書き）

消さないでとのお声があったので続行。
相変わらずのマイペース更新だけど、お付き合い下さい

プロローグ2 - 捕喰者

「お母さんはなんで何時も飛んでるの？」

『地に足着かないだけよ…ほら、おいで。』

「うわぁいっ！！」

母は綺麗な方だと思う…荒神に食い荒らされて、絶望しかない世界で黒くてデカイ、自称父と二人？でよく育ててくれたと思う

『残念だけど…ここでお別れなの…』

「なんでぇ？」

『それはね…』

母は、悲しげな顔で俺を抱きしめる…

「始めまして、…君。今日から君を預かる事になったベイラー・サカキだ。よろしくね。」

「はじめまして…」

「おやおや、人見知りかい？そんな事では、可能性を狭めてしまうよ？」

『私達では、この子を守りきれない…お願いします。』

「まかせたまえ。彼もまた、私の重要な観察対象だ…もちろん、君もね。」

「お母さん、いっちゃうの？」

『ごめんね…良い子にしてるんだよ？』

「うん、またね！！」

「さて、行こうか。」

サカキは、少年の手を引く

「よろしくね、おじさん！」

「ふむ、これでも27なのだが…かまわないか。今日から君の家に案内しよう。」

「はーい。」

灰色の天パの男性と、白髪の少年が廃墟の町を歩き出す…その足は、明日への一歩でもあった…

―――――――――――――――――――――――――――――

「ぐはぁっはぁっはぁっ…夢か…」

男…いや、少年は目が覚めた…遠い日の思い出を思い出していたのだ

しかし、今更夢で見るなんて…死亡フラグか？

「ここは…アナグラじゃない？本部か？」

清潔感漂うベットからは、丸で異世界のような光景が窓に映る太陽をまともに見るなんて…初めてだと思う

極東エリアは、アラガミの捕食により自転軸がぶれて夕焼けしか見れなくなっていたからな…

「綺麗な空だな…昔はこんなんだったんだったのかな…」

映る光景に目を奪われていた俺はある事を思い出す…

「左手が…あ、ある…」

黒いヴァジュラ…ディアウス・ビターに食いちぎられた左手はなぜか付いていた…なんでだ？

「これも、活性化したオラクル細胞の恩恵か…博士の言っていた通りだな…流石自称観察者…年季が違うな…」

我ながら、変な事に関心してるなとか考えていると病室に誰か入ってくる…先生か？

「こんにちは…あれ？起きたんですかっ？！」

「とりあえず、病室だから静かにすべきだと思いますが？はじめまして。」

「えっと…すいません、はじめまして？」

入って来た栗色の髪をサイドポニーにした女性は、少年のペースに完全に飲まれているようだ…少年はマイペースな性格らしい

「と、とにかく…先生を呼んできますねっ！」

「あ、ちょ、ちょっとっ？！」

彼女も対外、マイペースな性格なのか急いで先生を呼びにいった…

―――――

―――

―

「どこか、変な所はありますか？」

「後ろの人が、変な表情意外は特に」

「血圧、意識も問題無く至って健康ですが、気分が悪くなったら呼んで下さい。」

「わかりました。」

簡単に検査を済ませ、医師は部屋を出ていく

「それにしても、一つ聞いていいですか？正直、この際言うと貴女の名前とかはどうでもいい…ここは『どこ』ですか？」

「今からそれを説明します…落ち着いて説明しますから、よく聞い

て…」

「はい。」

至ってマイペースそうな女性は、表情を強張らせ、人差し指を立てて注目を促しこういった…

「ここは貴方の居た世界ではありません…ここはミッドチルダ、魔法の発達した世界です。」

少年はおもむろにナースコールに手をかける

「どこか、気分が悪いところでも？」

「いや、ここに頭の痛い女がいるから…」

「真面目に聞いてくださいっ！！」

頭を叩かれ怒られた…一応、病人なのに…

―――――――――――

―――――

―――

―

「で、この世界は俺の元居た世界では無く異世界と？」

「そういう事です。納得していただきましたか？」

目の前で球が杖になったら魔法みたいだと信じる他ない…待てよ？

「じゃあ、アラガミとかはこの世界にはいないと？」

「はい、なんでも食べてしまう怪物なんて現在、管理局も確認していません。」

「そうか…どっちにしろ、俺は死んだな。」

「そんな、何をいきなりっ？！」

額を手で押さえ、以下にも頭痛いですというポーズで少年は嘆く…

「まあ、細かい事は追い追い話として…お姉さん、別に敬語じゃなくていいよ。俺１５歳だし。」

「…へ？」

「俺の見立てではお姉さんは１８前後…クマがうっすら見える事から夜更かしや疲労をちゃんと取らないタイプの人間だね？早く帰って、ゆっくり寝な。死にかけのガキの相手てか疲れるだろう？」

「…」

図星なのか、俯いて今にもｏｒｚしそうな勢いだ…何この生き物、おもしろい

「そういえば、お姉さん名前は？」

「名前？」

「自己紹介まだだろう？俺は、フェンリル極東支部…通称アナグラの第一部隊所属の『天野（あまの）　豊（ゆたか）』です。階級は新兵で今年で１５だ。よろしくっ！」

開き直る事にした…偏食因子を月一に摂取しなくちゃいけない俺達ゴッドイーターは、万が一摂取出来なかった場合、自分の神機に喰われる運命しか無い…

「は、はじめまして…管理局の機動六課所属の高町なのはです。階級は一等空尉です。よろしくね、豊君。」

最も、この人達は知らないだろうが…知らなくていい事はこの世にいくらでもある
エイジス計画なんて所詮、付け焼き刃程度にしか俺は認識していない絶望が人類のゴール…でも、その運命に抗いたくてゴッドイーターになったのに…なんか、馬鹿らしくなっちまった

「豊君の特殊な相棒さんは、こちらで預かっています。その様子なら明日にでも退院出来るでしょうから、明日にでも返却出来るようにしておきますね。」

「わかった…ありがとう。えっと、高町一等空尉さん？」

「下の名前でいいですよ？みんな、なのはさんって、すれ違うときに頭下げるくらいに親しまれてるし。」

「そ、そうですか…じゃあ、なのはさんで…」

なんか、ヤバイ事を聞いてしまった…きっと、俺もこの人に調教されるに違いない

「では、明日迎えに来ますね。」

「わかりました、色々ありがとうございました。」

「いえ、お大事に。」

とりあえず、残された端末で色々見てみることにした
日本語表記すげぇとか色々見てみたが、この世界は世紀末では無いらしい
明日への希望がないあの世界よりは幾分マシなレベルか…
変わりに犯罪が多いみたいだな、発達した技術の分だけ悪質か

「とりあえず、帰ることを念頭に置きますか…このままじゃ誤魔化し切れないだろうし。」

生きるために、仲間の下に帰るために頑張る事にした
同期のコウタも心配だし、何よりリンドウさんが気になる
その為に、寝ることにした…もう、夜の１２時みたいだし

―――――――――――――――――――――――――

「シャーリー、このデバイスの解析は何処まで済んだの？」

「３０％程です。しかし、生体兵器としか分からずどのような技術で作られたかも今だにふ不明です…」

「みんなのデバイスも作ってるのに、ごめんね。」

「いえ、ほとんど趣味ですから。」

機動六課のデバイスルームにて、豊の神機が解析がなされていた…しかし、不明な点が多くて解析が進んでないのが現状である

「それにしても、このデバイスを持っていた彼…だいぶ、酷い目にあったみたいですね。」

「うん、体の殆どが普通とは違う細胞で出来ていたなんて…酷すぎる。」

「それぞれが、一種の単細胞生物であるなんて驚きです。」

話は、この武器の持ち主の話に移る…彼が生きるために、その身に受けいれたオラクル細胞に対して彼女達は否定的のようだ…『非人道的』、この一言で断ち切って…

後にこれが彼女と彼との溝を大きくする原因になるとは誰も気づかない

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

プロローグ2 - 捕喰者（後書き）

主人公の名前と生い立ちを語るでござるの回
チートハ　ブンカ　デゴザル

はっ？！変な電波が…そんなことより、次回は主人公の実力と神機の性能と位置づけを語ります。
ゴットイーターとか絶対フェイトそんは納得しなさそう。
そこら辺も書くようにがんばります。

準備は整った…諸君、派手に行こう…

追伸　主人公の名前とうｐ主の自キャラの名前は諸事情で違います。
だって、マブラヴｆＡの主人公の名前にしちゃった…ｏｒｚ

第一喰　初めまして、大嫌いだ（前書き）

個人的なＧＥ…はじまります（幼なのは風

第一喰　初めまして、大嫌いだ

「それでは、行きましょうか。」

「わかりました。」

意識を取り戻して次の日…多少、ミッド語についての情報を『捕食』して大体理解した
オラクル細胞便利過ぎる…情報を取り込み、最適化するだけで多様な種を生み出すだけの事はあるな…

自然豊かな町並を進み、沿岸部を黒い車が走る…先程から運転手の金髪さんが話しかけているがそれどころじゃない、なんて…

「綺麗だ…海ってこんなに綺麗だったんだ。」

「そうですか？普通だと思いますが？」

「絶望しかない世界で生きていたから、海が綺麗なんて考える暇無かったな…」

「そうですか…」

金髪さんはそれっきり、黙り込む…好都合だ、帰った時に博士に話したらさぞや喜ぶだろうな…
しばらく走ったら、他とは明らかに違う建物が見えて来た…なんか、アナグラと同じ臭いがするな

「着きましたよ、個々が機動六課です。しばらくは個々で暮らす事

になりますから、よく覚えておいてくださいね？」

「イエス、マム。しかし、大きいな…防衛は薄そうだけど。」

「はっきり言いますね…」

金髪さんが呆れながらも道案内してくれた…なのはさんは、訓練があると先に行ってしまった

部屋に案内され、無いようで本当に無い荷物を置いて部屋を出る

なんでも、『デバイスルーム』に行くらしい…俺の神機が、相棒がいるらしい

「お待ちしてました、貴方が『ユタカ　アマノ』さんですね？」

「ええ、そうです。」

『よう、相棒…遅かったじゃないか…』

「体が鈍ってしかたねぇ…返してもらいますよ？大切な相棒ですから。」

解析装置のある部屋への扉に豊が

「はい、その前に良いですか？」

「なんですか…」

イラついてますという態度を隠さずに眼鏡の女性に振り返る…その瞳は敵意すら孕んでいた

「その前に、私はシャリオ・フィニーノと言います。私だけ名前を知ってるなんてフェアじゃないですから。」

「じゃあ、改めて自己紹介するよ…俺の名前は天野　豊…こっちじゃ、ユタカ　アマノだったかな？」

先ほどとは、打って変わって温和な態度にフェイトは目を丸くする

「ええ、それにしてもミッド語が上手なんですね♪」

「一応、勉強したから…感じが知ってる言語に似てるから理解には苦労しなかったよ。言語の理解は、使う人の理解に最も最初の一歩だからな。」

これも博士の受け売り…なんだけどね…アリサにロシア語で喋りかけた反応は、とても可愛かったとだけ言っておこう

「で、聞きたいことって？」

「聞きたいことは、貴方の相棒…ずばりっ！ユニゾンデバイスとアームドデバイスのハイブリッドですねっ？」

「…はぁ？で、デバイス？」

デバイスって確か、魔法の杖だよな…そんなに分類あるんだ…説明プリーズ

「持ち主と生体的リンクをしながら戦闘を補助し尚且つ、デバイス自身を武器と扱うなんて…ミッドでは考えられない技術ですっ！」

「近い、顔近い…」

興奮しているのか、静止している金髪さんに見向きもせずに迫る…近い、顔近いから…

「シャーリー、そんなに迫ったら答えられないよ。」

「は、すいませんフェイトさん…つい癖が、ユタカ君もごめんね？」

「いえ、慣れてますから…」

主に博士のせいだけどなっ！！

「悪いけど、面倒だから後日纏めて話します。」

「そうですか…では、ドアロック解除しますね…はい、どうぞ。」

「ありがとう、スサノオ…起きてるか？」

『ん…ああ、起きてるぞユタカ。』

「良かった。」

銀の目立つ冷却ブレード改に銀のガトリング砲、対属性バッククラーの神機…開発コードは『スサノオ』…コアをスサノオが使われている…最も、神機好きなスサノオが満足する為に自身からコアを提供したらしいが…そのせいでブラックボックスが多いらしいが

「うん、軽いな…」

「嘘…推定重量約３０ｋｇ以上はある筈なのに…」

神機のコアと神機使いの利き手に施された腕輪型インプラントが同期の為に接続される…懐かしいな…刀身、銃身、装甲のオラクル細胞問題無し、各種チップと制御基盤も無傷のオールグリーンだ

「それはなｎ「質問は受け付けない…」…」

なんか、白けちまった…

「素振り出来る場所無いか？感触を少しでも取り戻したいんだ。」

「フェイトさん、確かそろそろなのはさんのライトニングとスターズの訓練の時間ですし、素振りは出来ないかもしれないけど、見学くらいはしてもらえばいいじゃないですか？」

「見学なら大丈夫だよね…ついてください、訓練場まで案内します。」

「…わかった。おねがいするよ…」

―――――

―――

―

金髪さんの指示に従い、相棒を担いで歩き出す…さほど長くない道程を経て、海に出た

「スゲェ…海だ…」

「海、好きなんですか？」

「…」

「うぅ…」

金髪さんが呻くが気にしない…冷ややかな視線を金髪さんにプレゼントしていると突然、水色の閃光がこちらに飛んでくる

「危ないっ！！」

「スサノオ…」

【あいよっ】

肩に担いだ神機で閃光を切り裂く…これ、大気中にある元素の固まりか…お世辞にも頭良い構成ではなく、力任せに固めたのが神機ごしに伝わる…これならコクーンメイデンのジャベリンのが頭良いかもしれん

「…喧嘩売られたから買ってきますね。」

「あ、ちょ、ちょっと…ユタカさん？！」

呼び止められたが気にしない…それより、あの馬鹿砲をぶっ放した奴を突き止めるのが先だ…

―――――――――――――――――――――――――――――――

「ど、どうしよう…」

私が放ったディバイン・バスターはなのはさんに逸らされて、向こうのビルの誰かに当たったみたい…この時間帯なら多分フェイト隊長かヴィータ副隊長だろうけど…

ヒュ…タッ…

私達の居る場所の近くのビルの上に誰かがいた…へそ出しと私に近い感じを受けるけど、その姿はどこか怒気を孕んでいた…

「誰だ…さっきの馬鹿砲をぶっ放した奴は…俺は、ユタカ　アマノ…フェンリル極東支部の第一部隊所属だ…」

「えっと…私です。スバル・ナカジマって言います…始めまして。」

その人は肩に白い大剣を担いでいた…

さっき、跳躍して来た所をみると空戦が出来ないみたいだ…なんか、お揃いだな…綺麗な白髪で優しそうな笑みを浮かべている、怒っていないのかな？

「そうか、俺はお前が大嫌いだ…」

「…へ？」

「だから、死ね…」

やっぱり凄い怒ってる～っ？！

「本当は止めるべきなんだけど…訓練内容変更、彼に一撃入れたら状況終了ね♪」

「そんなっ?!良いんですかっ?!」

「教導責任者は私だし、私ばかりじゃ飽きるでしょ?」

「スバルっ!一時撤退するわよっ!」

「わ、待ってよっ!!」

こうして、私達の初対面の喧嘩は始まった…

「さて、今更だけどいいのか?非は向こうにあるけど、喧嘩を吹っ掛けたのは俺だぞ?」

「たまには、刺激が無いと…マンネリ化による停滞が教導官には1番怖いから。」

「そうか…俺の条件は?」

「みんな気絶させたら勝ち…なんて、どうかな?」

「イエス、マムっ!」

俺は走り出した…ビルからビルを飛び移り、壁を蹴って跳躍する…

「さて、何処にしるかな…っとっ！！」

赤髪の少年が槍で突撃し、前からスバルと言うのが突貫を仕掛ける…が

「力点をいなされたっ！ぐっ？！」

「エリオっ？！くっ…」

まずは一人…槍をいなして体勢を崩して、がら空きの腹に回し蹴りを叩き込み意識を刈り取る…エリオとか言うのは、気絶しているそのままは流石に可哀相なので肩に担ぐ

「後三人…かな？スバルに、山吹に、桃色か…火力的に大丈夫かな？」

相手の心配とか随分と余裕だなと思いながら歩き出す…肩に頭二つ位違う少年を担ぐが、オラクル細胞に強化された体には問題ない…サーチ&デストロイで行こう

「ああ、エリオがやられちゃった…」

「フェイトちゃん、落ち着こうか…」

友人のテンパり具合にドン引きしながらなのはは対応する…

「ねぇ…なのは、私…あの子に嫌われちゃったのかな…」

「ん？」

「ユタカ…私には素っ気ないんだよ…意地悪ばかりする…」

ガキっぽいなぁ…と考えながら、なのはは原因を探り、一つ思い当たる

「フェイトちゃん、豊君に自己紹介ちゃんとした？」

「え？そういえば、してない…」

やっぱりとなのはは頷き、フェイトにユタカの習性を説明する…

「豊君、他人にはとことん冷たいみたいだけど、名前がわかると普通なんだよ？きっと、一般礼節に厳しい子なんだよ。だから、あんなにしっかり一人で立っていられる…」

「…」

なのはは、ユタカが戦っている方向を見ながら話す…フェイトは青ざめて両手で顔を隠して悶える

「うらやましいな…きっと、色んな人を見て、会ってきたんだろうね…」

「…そうだろうね…凄いよ、あの子は…」

突如、とんでもない爆発が起こり、ビル街が吹き飛ぶ…

―――――――――――――――――――――――――――――――

《スバル戻ってっ！敵は手強い…》

エリオが一瞬でやられて、その5分後にはキャロとの念話が通じなくなった…多分、敵に落とされた

なのはさんが、一撃で良いと言ったのはこういう事かと痛感していた…

「ちわ～、三河屋でーす。」

「え？」

私が隠れていたビルの階段からさっきの奴がエリオとキャロを担いで現れる…器用に片手でエリオとキャロを支えている

「じゃ、コイツら置いてくわ。人質とか言われたらムカつくし…」

じゃっ、とそいつは背を向けて去ろうとするが…

「く、ナメるなぁぁあっ！！」

そいつの背中を目掛けて、クロスファイアを撃ち込む…撃ち出した四発全て背中に吸い込まれた筈だった…が

「ふっ…」

手にした大剣で全て掻き消された…そんな、私の…ランスターの射撃が…

「はい、三人目♪」

私が最後に見たのは、大剣を振り上げた、口角釣り上がった悪魔の顔だった…

―――――――――――――――――――――――――

私がティアナとの合流ポイントに戻った頃には、ティアナは倒れて頭に大きなタンコブが出来ていた…エリオとキャロは眠るように気絶していた…この扱いの差は一体…

「遅かったじゃないか…暇だったから、素振りしてたよ。」

物陰から男が…白い大剣を担いだあの男だった…

「みんな、こんなに早く…」

「切り込みを片方潰した後に後方支援を叩く…常套手段だぜ?」

「くっ…」

私は、リボルバーナックルを構えてヒット&アウェイの体勢に入る…

「せっかくのシチュだ…試せる事は試させてもらうぞ?スバル・ナカジマ…」

その人は、袖の無い左手を前に突き出して構える…左手は、黒い

霧に覆われると黒いトゲトゲした装甲に覆われる…この人、まさか最初から手を抜いていた？

「じゃ、良い夢を…」

気付いたら目の前から消えていた…私が目を覚ましたのは医務室のベットの上だった

―――――――――――――――――――――――――

「手応えねぇな…シユウのが強いぞ…」

スバルの腹を打ち抜いた左手を元に戻し、気絶した彼女らを見下ろす…荒廃したあの世界で生き残るのに俺はなんでもやった…対アラガミ戦用の体術やＣＱＣ…こんな形で役に立つたんて予想外過ぎたが…

「ああ、しんどい…ここに来てから食あたり起こした気分だよ…」

『多分、大気中の元素を神機と左手のオラクル細胞が捕食しているからだろう…喜べ、バレット撃ち放題だぞ？』

「俺はトリガーハッピーじゃねぇっての…おぉい、終わったぞっ！！」

「お疲れ様、予測タイムより３０分早いなんて凄いよっ♪」

「隙だらけだったし。」

「耳が痛いです…」

なのはさんが苦笑いしている中、後ろから金髪さんが来る…

「す、すいません…自己紹介を忘れるなんて…私はフェイト・テスタロッサ…機動六課のライトニング分隊の隊長を勤めてます。」

「さいで、俺は天野　豊…こっちじゃ、ユタカ　アマノだな。よろしく頼むよ、テスタロッサさん。」

「はい、よろしくね。」

笑顔が可愛いな…なんて考えていると、向こうから赤い服の少女が飛んでくる…地に足着かない人ばかりだな…頭大丈夫だろうか？

「初めてだな、私はヴィータ・ヤガミ…ここのスターズ分隊の副隊長を任されている…よろしくな。」

きつく当たるような態度だが、自己紹介されたからにはやり返すのが礼儀だ

「は、私は人類の保護と化学技術の復興を目的とした組織…フェンリル極東支部、第一部隊の遊撃担当のユタカ・アマノといいます…よろしく。」

きっちりとしかた感じにされたきっちりと返す…それが俺の方程式〈ルール〉だ…何か、一つを守る気合いで行かないとオラクル細胞に心まで喰われるからな…多分

「それから、機密保持の関係で、ここでは詳しく貴官の疑問にはお

答えできないのが残念です。」

「そ、そうか…とりあえず、こいつらを運び出すぞ。」

「手伝います。」

「お、助かるぞ。じゃあ、お前…空は飛べるか？」

「いえ、母の遺言が地に足着いた人間になれとの事なので、そういった練習はしていませんが、足には自信があります。」

皮肉も忘れない…このどこか甘ったるいとこが堪らなく我慢できないからだ…

アラガミ共は、同じである母をも食い殺しやがった…復讐はするまでもなく、その場で仇をやったがね…語るべき事じゃない

「そ、そうか…じゃ、エリオを頼む…スバルは私が運ぶから、ティアナはなのはが、キャロはフェイトが運んでくれ。」

「わかったよ、ヴィータ副隊長♪」

「からかうななのはっ！」

ああ…イラつく、思わず食い殺してしまいそうだよ…本当に我慢できない

―――――――――――――――――――――――――

「じゃあ、改めて自己紹介を…はい。」

「フェンリル極東支部、第一部隊の遊撃担当のユタカ・アマノです…よろしく。」

おぉっ！と食堂に歓声が上がる…テンション高いなコイツら…リンドウさんを見習え

「私も改めて、管理局、機動六課のスターズ分隊隊長のナノハ・タカマチです。よろしくね、豊君。」

「機動六課、ライトニング分隊隊長のフェイト・テスタロッサです。他の業務の関係上、あまりいませんが…よろしく。」

さっきの二人ね…よろしく

「さっきも挨拶したが、スターズ分隊副隊長のヴィータ・ヤガミだ。よろしくな。」

「私は初めてだな、ライトニング分隊副隊長を勤めるシグナム・ヤガミだ。バックヤードの隊長も兼任している。確か、アマノは大剣使いらしいな…今度、手合わせ願いたい、よろしく。」

「よろしくお願いします。」

ヴィータ副隊長はさっきので良いとして、この人は初めてだな…強そうだな

さっきは手応えなさすぎだから、是非も無い

「私は、スターズ分隊のセンターガードのティアナ・ランスターよ…よろしく。」

「私は、スターズ分隊のフロントアタッカーのスバル・ナカジマですっ！宜しくねっ！」

「ああ、よろしくっ！」

片方の山吹…ティアナは、頭脳派だがプライドが高い割に自信家では無いようだ

スバルは、頭悪そうだが真っすぐだな…うちの腹黒支部長よりはましか…あの人、絶対なんか変な事してるし…博士に聞いたらどうかなと言っていたからあながち間違いではない筈

「ライトニング分隊、ガードウィングのエリオ・モンディアルです。よろしくお願いしますっ！」

「同じく、ライトニング分隊、フルバックのキャロ・ル・ルシエです。こっちは、フリード・リヒです。よろしくお願いしますっ！」

「キュルっ！」

「よろしく。まだちっこいのに偉いなお前ら…」

握手した後に軽く頭を撫でる…軽くなのは俺が馴れ馴れしいのが自分で耐えられないから

「挨拶も済みましたし、質問良いですか？」

ホクホクとした気持ちでいると、フェイトから質問された

「不躾で申し訳ありませんが…貴方は何者ですか？魔力行使なしでのあんな筋力増強…常人では耐えられません。」

いきなり核心なもんだから驚いた…なのはさんも諌めているが彼女の気持ちは揺るがんだろう

「良いですよ、教えてあげますよ…そんなに知りたければ…な。」

作者のタイプ的に辛いが頑張ってもらおう

まず、俺は俺の世界の歴史を話した…

２０５０年、地球上に突如出現した「神」の名に冠する人類の天敵…アラガミは、
地球上のあらゆる対象を「捕食」しながら、多様性に富んだ変化を遂げた
そんな彼らを形作るのは、オラクル細胞というＤＮＡと炭素に支えられた生命体
を構成する細胞とは一線と記している
オラクル細胞は、「考えて、喰らう細胞」であり一つ一つの細胞がその生命活動
を完結しているのだ
地球上の既存の生命体では考え得ない、構造が根本から違う言わば「捕食」に特化
している生命体である
アラガミは、そんな考えて喰らうオラクル細胞の郡体であり、それ自体が幾万もの
細胞の集まりなのだ
おまけに、そのしなやかかつ強固な細胞結合とオラクル細胞の特性の前では既存の
兵器は無意味、魔法も同様と俺が証明してしまったから、効果は期待できない

「なんか、勝ち目がなさそうですね…魔法も質量兵器も効かないなんて…フリードも食べられちゃう…」

「そこで、神機が生まれたのさ。」

神機とは、アラガミを構成するオラクル細胞を統括する器官…「コア」…正式名称は
「オラクルＣＮＳ」といい、コレを改良して「アーティシャルＣＮＳ」という神機の
中枢パーツにするんだ
もっとも、コアをキズ無しで回収するなんて至難な業はそうそうできる人がいないが
しかし、何故神機でないと対抗出来ないかというと、神機もまた、オラクル細胞で構成
された生体兵器だからである
神機を使い、アラガミの細胞結合に働きかけて結合を破壊、コアを奪うなり破壊なり
すれば、アラガミを構成する細胞の結合は解け、その場での危機は回避されるが…

「あくまでも、その場だけ…コアがまた生まれればそれを中心にアラガミは生まれる。霧散しとは言え、オラクル細胞は単体でも生きていけるから絶対的死は与えられないのが現状だな。以上、以降は規律が絡むから無理なんで、コレで終わり。ご清聴に感謝します。」

「はい、質問。」

「なんでしょう、スバルさん？」

「オラクル細胞って、何でも食べるんですよね？使う人は大丈夫なんですか？」

いきなり核心突かれて驚き…頭回るんだなコイツ…

「っま、普通なら、神機もった手を侵蝕されてお陀仏なんだけどね…」

奥に座るシャリオさんが顔を青ざめている…コイツ、触りやがったな…

「そこで登場するのが、Ｐ５３アームドインプラント…通称『腕輪』って言って、こいつは識別ビーコンにその他もろもろあるんだけど…まあ、体に侵蝕して融合しているオラクル細胞の制御をしているＰ５３偏食因子を摂取する為の物な訳だが…」

「そんなの、非人道的過ぎますっ！」

うわぁ…でたよ…

「勝つために神機が必要なのはわかりました…しかし、だから言ってそんな人間の体を改造するような真似が許される筈がありませんっ！」

何様だこの人…ダメだ…正義感とか死ねば良いのに

「だから、「うるせえよ…」へ？」

「アンタは、怒鳴らなきゃ分からないようなガキと違う思うからあえて怒鳴らないぞ…アンタ、アラガミに何人毎年食われているか想

像出来るか？」

「そ、それは…」

「一億だ…俺の世界の人口は現在９億弱…正に人類存亡の危機って奴だ…」

周りがざわつく…一億も一つの世界で死んでるとか戦争かよと思いたいぞ

「だからと言って…人間を化け物にするなんて…」

アカン…切れた

「ああそうさ…俺は化け物だ、だから化け物相手に戦えるし勝てる…だけど、アンタは戦ってる皆の顔を見た事無いだろ？無いはずだ、見てたらそんな事言えるはずが無い。」

「…」

金髪は俯く…トドメさたる

「ガキでさえ、未来への希望を知らない世界なんだ…」

「…」

「だから、せめてそいつらが生きていける世界を作りたい…逃避では無く、根本的な解決口を見つけてやる…」

金髪は黙り込んだまま喋らない…泣いているんだろうか、知ったことではない

「失礼する…」

『以下同文』

俺とスサノオは重苦しい部屋を出る…宛がわれた部屋に戻るのは馬鹿らしいから砂浜を目指す…

―――――――――――――――――――――――――

「ふぅ…機密漏洩せずに済んだ…博士に解剖されちまうよ。」

『だと思ったよこの自分本位野郎。』

二つの月が綺麗な海を眺めていた…美しいこの光景がかつてあったのかも知れないと考えると俄然やる気が出る
荒神になる？なんだったら、ゼウスにだっても、因果にも喧嘩を売ってやる…
あんな理不尽な世界…滅ぼしてやるんだ

「君がユタカ・アマノ君だね？」

「ん？」

気付いたら後ろにいかにもなオッサンが居た…いや、気付いていたけどあまりにも『脆弱』過ぎてスルーしていた。

「私は、このミッドチルダを守る首都防衛部隊の者だが…君に質量兵器保有の疑いがかかっている…身の安全は保証する…武装抜きで

話がしたい。」

ふーん…へー…

「はっきり言ったらどうだよ…ガキ？」

「何？」

「『テメェは害悪だから、こっちの指示に従え、じゃないと営倉ぶち込むぞ』ってな…そんな気概も見失っちまったのかいガキ？嫌だねぇ…無駄に歳喰った典型だろ、えぇ？」

「く、コイツを捕らえろっ！」

「お待ちなさいっ…」

オッサンらを止めるように金髪にカチューシャをしている貴婦人が現れる…

うん、好みだね…手は出さないけど

「この者の身柄は、私達聖王教会が保護します…私はカリム・グラシア…しがない騎士ですが、いいですか？」

「オールＯＫ…少なくとも、礼儀知らずで名も名乗らない屑より信頼出来るな。」

「貴様…この期に及んで「右脳と左脳がバイバイするが構わんかい？」くっ…」

こうして俺は、カリムさんの居る聖王教会に引き取られる事にな

った…シャッハさんも礼儀正しい方なので、きっと天国だろう…

第一喰　初めまして、大嫌いだ（後書き）

豊の習性発覚とまさかの説明回…ヴァジュラを単身撃破できるのに魔力で強化した程度の人間に負けるのもね…むしろ負けるの無理だろ

ついでに、豊の神機のコアも発覚…豊のは加工していない純正オラクルＣＮＳな設定…今後生かせるのか…俺？

まさかの聖王教会行きの展開…どうしてこうなった／（＾○＾）＼

第二喰　天災（前書き）

アラガミはある意味、地球という星が地上に生きる者達に出した答えみたいですよね？

滅びろっ！！って

＊０２／１８：不自然な点を修正！

第二喰　天災

聖王教会に来てもう、二日間…この次元世界とやらの基本的な事を勉強し、魔法について簡単に教えてももらった

「以上が現在主流の二系統の差です。」

「大丈夫です、シスター・シャッハ。」

つまり、固定砲台か近接戦闘の二択ね…なんか、旧型神機の考えに似てるな

「貴方の場合、わざわざ強化魔法を使わなくても十分過ぎるくらい力はありますから、手加減か衝撃をコントロールする術を学びましょう。あんな事はもう勘弁です…」

「その節はスイマセン…」

ここに来て最初、シャッハ・ヌエラ氏と模擬戦をしたら散々な事になった…

どう見てもトンファーな武器で戦っていたのだが、武器を素手で受け止めて剣で吹き飛ばしたら騎士甲冑が粉々になって…壁を抜けて吹き飛んでしまったのだ

いやぁ、悪いことをした…

「貴方は…戦いをどう考えていますか？」

「…？」

急に真面目な話をされましても困るな…戦う理由？

「俺…この世界みたいな景色見た事ないんだ。」

初めましてこの世界に来て感じた事を話した…海が綺麗な事、空が綺麗な事、見る景色全部が綺麗な事…

「まあ、最初は惰性で…生きる為に、ストイックに戦う事だけだったんだけどな？」

「そうですか…確認なんですが、左腕はもう人間の物では無いのですね？」

「そう、化け物の腕だよ…悪魔の、人類の天敵の手だ。」

腕を装甲で覆ったり戻したりを繰り返す…

「まあ、いいけどね…結構気に入ってるし。」

「敵になってしまうのに…気に入ってるのですか、貴方は？」

シャッハは理解出来ないようだ…この二日間、カリムに命じられて彼の監視と教育をして来たが、彼女は彼が人間として何かを失っている気がしてならないのだ

「お揃いなんだ…両親と…俺、アラガミに育てられたから。」

「そんな…今までの話を聞く限り、人間を育てるアラガミなんて信じられない。」

「早い話、アラガミが『育てる』なんて事も有り得ないんだが…まあ、変わり者だったんだよ…多分。」

「ぶっ飛んでますね…ん？」

シャッハは何かを感じたように動きを止める…念話という奴だろうか？

豊は寂しげに窓の外を見る…その瞳は、今は帰れぬ土地と友を思う

――――――――――――――――――――――――

清潔感漂う病室、白髪の少女が眠っていた…

「ここは…」

夢だとわかるが起きるのも億劫だからそのまま彼女は夢をさ迷ってみることにした

「あれは…」

贖罪の街と呼ばれる場所…そこで紫のドレスを来ているような異形の女性…

それを守るように佇む黒い大きな蠍…

女性の手の中には、人間の子供が寝ていた…

『この子を見つけて早いものね…』

『まるで、与えられたように得た我らの自我は、この子を守るのを

選んだが…』

その二体の異形…アラガミは言葉を喋ったのだ
女性のアラガミには表情さえ伺える

『もう、この子は成長しない…来るべき業の時までは…』

『星に助けられ、星に利用されるか…考えてみれば、私達アラガミもまた、星に利用されているのかもしれないな。』

『そうね…』

その小さな男の子は、幸せそうに寝ていた…いや、幸せそうに見えるだけなのかも知れない

―――――
――――
―

「…はっ！」

起きれば病室だった…寝る前なら、仲間を失う原因を作った責任に押し潰されて発狂していただろう…だが

「あら、アリサ…起きていたの？」

「サクヤさん…」

何故か頑張れる気がした

「私、夢を見たんです…」

「夢？」

とりあえず、目の前の人に話してみよう…この感情を…

―――――――――――――――――――――――――――――

「なにこれ…忘〇の城かよ…」

ギリギリアウトなメタ発言をした豊は夜中に起きた…
あの後、明日にでもカリムさんと話せる時間が出来たから自由時間になり
特に面白い事も無く寝たのだが、悲しい夢を見たのだ

「絶対身に覚えねぇ…昔、声もあそこまで高くなかった筈だし、誰の夢だ？」

かくれんぼしていたら、隠れていた箪笥の隙間から両親の喰われる姿をただ見ているという面白みに欠ける夢だった訳なんだが…

「なんか…寂しい夢だったな…」

人間くさい事考えてんなと思いながらふかふかベットに潜り込む…これを堪能できるのも残り僅かだと思うから…

―――――――――――――――――――――――――――――

早起きというか、じい様みたいな生活スタイルな豊だ…日の出と共に起き、日の入りで寝る…つまり、何が言いたいかと言うと…

「くぁ～…暇だぁ…」

早起きし過ぎて暇を持て余しているのだ…体内時計では日の出の時間らしいが、外は星が輝く時間帯…が終わり、太陽がうっすらと見えて来たくらいだ

「ああ…暇だ…スサノオ起きないし…暇だ。」

アイデンティティを疑いたくなるような現象だが、神機が寝ているのだ…機能自体は問題無く使えるが、連携とか心配だな…敵さんこないｔ

「来ちゃったよ…しかも、とびっきりな奴。」

窓の外からミサイルを確認した瞬間、盾を展開して衝撃に備えた

―――――――
――――――
――――
―

骸骨のような見た目に、旧文明兵器のようなアラガミ…『クアドリガ』
動く当たり判定、チートミサイル、骸骨戦車などなど…様々な愛称を持つが、
それは一重にそれ程なまでに嫌われているとも取れる

「うざっ？！部屋全壊だよ…」

現在、吹き飛ばされて協会の中庭にいるのだが、トマホークミサイルの恐ろしさを物語る光景が目に入る…それは、ぽっかりと開いた『穴』

ミサイルの爆発で吹き飛ばされた建物だった…被害範囲で生存者は絶望的だろう

しかし、オラクル細胞だけではアラガミは成立しない…

オラクル細胞を統括するコアがあって始めて成り立つのだ

俺からもれた細胞がいるのは、まだ分かるが…コアはただのオラクル細胞からは派生しない

おまけに偏食因子がまだ有効の筈だ…俺から生まれたなら何故俺にピンポイントで狙った？

謎は深まるばかりだが、敵は待ってくれないらしい

「うおっ？！ミサイルの次はレーザーかよっ？！」

クアドリガの前面装甲が開いたかと思うと、いつものミサイルではなく戦車の砲身のような砲身が姿を見せたのである…放たれた閃光により、中庭の泉は蒸発し、草木は燃え盛っている

「俺狙いなら、遠くに行くべきだな…」

足を気にしながらダッシュでその場から離れる…挑発の為にレーザーをミサイルポットに当てるが…

「嘘…もう壊れたよ…」

ミサイルポットを形成しているオラクル細胞が結合崩壊、つまり壊れた訳なのだが、
いくらなんでもモロ過ぎる…何故？
『この世界に際限なく存在する魔力素に対応仕切れなかったみたいだな。細胞内のエネルギーが飽和状態でしかも脆い。屑だな。』
要するに、細胞特有の捕食能力が仇になった訳か…あれ？
「俺…まさか、破裂フラグ？！」
『気を抜くな…来るぞっ！！』
死んだ…帰る前に頭パーンとかで死んでしまうかもしれない…この腹いせを…
「てめぇにぶつけてやる！！」
剣を突きつけ、死刑宣告をする…周りの者たちはただ見ている他無かった

―――――――――――――――――――――――――――――――

私は悪夢でも見ているのだろうか…教会は崩れ、巨大な戦車のような『何か』が暴れていた…豊さんが戦っているから援護しようにも魔力がすぐに尽きてしまい魔法が発動出来ない…この辺りにＡＭＦに関連した物は見当たらず、ＡＭＦ特有の魔法が消えているような感じではなく、体の中から魔力が漏れ出ている感覚だ…

程なくして髑髏のような戦車は倒れ、豊さんが立っていた…剣から黒い口が出てきて、何かを抜き取った瞬間、倒れた戦車の体が爆発…豊さんは協会の正門の方向へ飛ばされてしまった
原因は不明だが、髑髏戦車が爆発してから数分…失った魔力が帰ってきた
もしかしたら、彼は何かしっているかもしれないが、それよりもカリムを
この瓦礫の山から助けなければ…

「大丈夫ですか…騎士カリム…」

「ええ…つっ？！」

カリムの左足はいびつに曲がり、血が出ているものの時間をかければ治るレベルなのは幸いなのだろうか…

吹き飛ばされた豊は血まみれながら、生き埋めになった者達に死傷者はおらず、豊がいたのはいつも空いている旅の者を泊める棟なのも幸いした…
しかし、手放しで喜べるものではなかったが…

―――――――――――――――――――――――――――

「豊さん…血まみれですが…」

カリムさんを抱えたシャッハさんが近づいて来る…シャッハさんはかすり傷ばかりの軽傷だが、カリムさんの左足は明らかに重傷だ

「俺の血じゃないから平気です…それより、カリムさん達重傷者を

安全な場所に搬送しないと…クアドリガ級相手に他人を庇うほど俺は余裕のある奴じゃない…急げっ！第二波がもう来るみたいだ…死ぬぞっ！！」

「は、はいっ！」

あの時のリンドウさんみたいだなと思いながら剣を…興奮したからなのか、いつもの美しい白い剣にレールガン…対貫通バックラーが全て凶々しい造形の黒い神機…スサノオになっていた

「全く、エンジン温まって来たなっ！」

彼の顔はいつもの余裕のある笑みから悪鬼のような表情になっていた…

顔には神機と同じ色の筋が走っている

クアドリガの群…その数、五体に突っ込んで行った

―――――――

―――

―

クアドリガの群のせいで辺りの魔力素は食い尽くされていた…治療が行われている棟からは遠くまで誘導したが付け焼き刃だろう…魔法が効かないとか消すとか以前の問題で使えなくなると言うまさかの展開だ…治療とか魔法頼みだろうし早めに食い散らかすっ！！

「いい加減にしやがれっ！」

神をも浸蝕する剣…タキリの一撃が一体のクアドリガの脳天を割り、クアドリガを霧散させる…やはり、アラガミとはコイツら何か

が違うっ！

『やはり、コアが無い…コイツはアラガミの姿をした張りぼてなのかっ！』

「らしいな…残り三っ！」

開いた前面装甲に剣を捩込みえぐり出す…何かのスイッチを押したようにクアドリガは霧散する

「面倒だなっ！」

残ったクアドリガの図体を足場にし、間合いを取る…剣を可変させて銃にして欠けたミサイルポットにクアドリガの苦手属性レーザーを叩き込み、二体を霧散させる

「ラストっ！」

残った一体の脇腹から剣を突き刺し、一気に下まで振り下ろす…クアドリガの群はこれで全滅…なのだが

「俺の…せいなのかな？」

クアドリガ発生の原因が他に思い出せ無い…誰かの悪意も感じるが根本的原因はきっと、俺だろうが…

「まあ、狩り尽くせば良いだけさ…」

冷徹な意志を固める…守るでは無く、狩る

俺に誰かを守るなんて出来るはず無い

その後、歩いて教会に着くまでに４時間かかったのは俺が方向音痴だからだろう

今後について話し合わないとな…最悪、ソーマのように生きるのも良いかもしれない

最も、彼の方が俺より数倍マシで崇高な感じだろうが

何せ、正真正銘のアラガミだしな…俺…まだ三分の二に留めてるけど

とにかく、天災のような夜明けはこうして終わった…

第二喰　天災（後書き）

主人公がかなりのチートだが、変わりに死亡フラグを背負っているという罠

頭パーン！エンドも有り得るから楽しいな…貪欲故の罠みたいに書いてみました

第三喰　任命と迷い（前書き）

地味に長引いた執筆時間…試行錯誤した結果がこれだよっ！

第三喰　任命と迷い

クアドリガ共の襲撃から早くて真夜中…聖王教会の仮修復を手伝っているときに、手慣れてるなと言われて、それだけ酷い世界から来たからと返したら何故かジュースを奢ってくれた…そんなに酷いかな？

―――――
――――
―――
―

現地時間の正午、左足の骨折で入院中のカリムさんの見舞いに来ていた…
カリムさんが見た物について確認したいと迫られて…その、ねぇ？

「つまり、あれがアラガミなんですね？」

「はい、装甲自体はかなり脆くなっていましたが間違いなくアイツらはアラガミ…クアドリガです。」

『クアドリガ』…骨ような外見に人間の使う兵器を組合せたような外見の大型のアラガミ
全身に内蔵されたミサイルにその巨体による体当たりで隙の少ないで有名なアラガミでもある
諸君も奴のバックステップで引かれた経験はあるだろう…ある筈だ

「不幸中の幸いなのは…死人が出なかった事ですね。魔力が奪われ

ては私達騎士でもただの丸腰の人間ですし…」

「何故、魔力が無くなってしまったか心辺りはありませんか？」

カリムさんの嘆きを聞いて、シャッハさんが疑問を直でぶつけてくる…うん、姫を守る女騎士か…絵になるな

『その疑問は俺が答えるぜ。』

俺が妙な関心をしていると、胸元で悪趣味な…黒の十字架に黒い蛇が三匹纏わり付くと言うなんとも言えないデザインになってしまった相棒が彼女の疑問に答える…頭痛い

『アラガミを構成するオラクル細胞がなんでも捕食できるのは前にも言ったな？』

「ええ…昨日のあの光景を見るまではとてもでは信じられませんが…うっ」

「シャッハ…無理しないで。」

「いえ、大丈夫です…」

昨日、俺がクアドリガを捕食した現場でも見たのを思いだしたのだろう…まあ、黒くてデカイ口がバリバリとかみ砕いて何かを食っていたらトラウマものだろう

『アラガミ共が大気中の魔力素をも捕食しているんだよ。それであんたら騎士や魔導士の体内の魔力が大気中に霧散…高いところにある水が低いところに流れるの同じ原理だな。』

「最悪じゃないですか…昨日みたいな奴がまた来たら聖王教会どころか、管理局だって一たまりはありませんよ…」

「これでわかったろ…どんな世界で生きていたか。」

「確かに、ドライにならざるえない世界でしょうね…」

カリムさんとシャッハさんの目が痛いです…同情いらない

『まあ、幸いなのはオラクル細胞の捕食限界と奴らを倒すとオラクル細胞が死滅して中の魔力素が飛び出て元に戻る事くらいだな。』

「おかげさまで頭打ったけどね…塀が陥没したのを見たときは流石に傷付いたな…」

今後の敵の分析と対策案を話しているとノックが聞こえる…誰だろうか？

「やあ、姉さん…具合はどうだい？」

「ロッサ…忙しい中ありがとうね。」

「気にしないでよ。それより、教会の被害はどうなんだい？」

翡翠の髪に白いスーツ、どこぞの細めすけこましみたいな雰囲気だな…ん？誰だそれ？

そんな奴、極東支部にはいなかった筈だ

「宿泊棟は全滅ですが、騎士やシスター達に死傷者が居ないのが不

幸中の幸いでしょう。」

「そうか…大変だったね。ところで、そこで雲を見ている彼は？」

「ああ、はじめまして。フェンリル極東支部第一部隊所属、ユタカアマノです。よろしく。」

「聞いているよ、機動六課の新人相手に無被弾勝利だけでなく隊長陣にも勝てるか分からないと思わせたらしいね。」

「そ、そうなんすか…」

戦っててもいないのにそのような判断されるとは…失礼なこれでも、三分の一は人間は人間のままなのに酷いなぁ

「いやぁ、姉さんのお見舞いに来たのに君に会えるなんて驚いたよ…正直、機動六課から颯爽と姿を消したからてっきり今回も…ってね。」

裏が読めなぇな…いや、今までが単純馬鹿過ぎたのか？

「逃げも隠れもしねぇ…第一、一宿一飯の恩義があるしな…なんか、こっちに来てから骨の休まる時間無しって感じだけど…」

頭を掻いて明後日の方を向きながら、豊は話す…受けた恩義は一生忘れない

リンドウから豊が学んだ一つである

「そうかい…じゃ、僕は仕事が押してるから失礼するよ。姉さん、無理しないでよ？」

「わかっているわ…貴方も気をつけて。」

「大丈夫だよ…こう見えても、強かな男で通っているんだからさ。」

ヴェロッサ・アコース…彼とはまた会いそうだな
少なくとも、半年以内には

―――――――――――――――――――――――――

病院の一件から約四日…ただ、教会の騎士達と剣を合わせる日々が続いた
途中、オウガテイル級のアラガミ？が現れるが、皆倒してもコアらしき物が見当たらない…どういう事だ？
因みに、コンゴウ位のアラガミ？なら四人一組なら騎士達は対応、駆除出来るようになっていた
凄いねと言うと、謙遜されるが…

「さて、今日貴方に来てもらったのは他でもありません。」

現実逃避は止めよう、今俺はカリムさんの部屋に呼び出されている
足にギプスを巻くと言う痛々しい姿ながらも、凛々しい態度で職務をこなしている…
男性の騎士から人気が高い彼女だが、その実態以下ほどか…俺は彼女の使いパシリ状態だ
因みに、見返りとして聖遺物の一部を見せてもらい、帰る手掛かりを探しているのが実状…しょっぱいながら頑張っている

「聞いているのですか…ユタカさん？」

「スイマスン、昨日のアラガミ駆除に手間取りまして…夜遅かったので…」

「そう…で、相手はどのような？」

「ヴァジュラ…獅子のような外見の雷を操るアラガミですが？報告しましたよね？」

「い、一応確認したまでです。それより…そのヴァジュラに似たような個体が見付かりまして…」

「ん？こりゃ、ディアウス・ピター…ヴァジュラの進化した姿みたいなもんですね。こいつら、頭良いし部を弁えているから困り者です…（旨いのは認めるが狩るのが面倒だ）ボソッ」

「そうですか…実は、この個体が機動六課の隊舎を襲い、保管していた聖遺物…ロストロギアを補食後逃亡したようで…シグナムさんがその際、怪我をしたようです。」

「そうすか…お大事に…（貴重な文化遺産に手を出すとは…コアも残さずに食い尽くしてやる…）ボソッ」

先程から、シャッハさんがこちらの独り言に反応しているが無視っ！

コウタと文化遺産保守同盟を結んでいる…因みに、アナグラの防衛班のブレンダンなども盟友だ…

例え世界を違えようともその意志は変わらないっ！！

「それで、貴方にお願いが合って呼びました…これを。」

「これは…聖王教会、騎士任命書？」

端の方に血判のような物も見受けられる…どうやらマジの正式の物らしい

「貴方をこれより、騎士に任命します…と言っても、貴方を守る為の措置。管理局と貴方の関係を最初、教会のご老人方も憂いていたようですが、貴方の活躍と生活態度を鑑みて、庇う価値ありと判断したようです。」

『使えるから、正式な子飼いにしちまえってか？』

「そうです。しかし、それだけ認められているとも受け取れますよ？」

「口が上手いねぇ…だてに裏を生きていないってか？」

「フフッ…」

不適な笑みが少し怖いが良いだろう…使えるもんは使ってやる

聖遺物の調べも大体済んだ…後は、管理局の保管している物くらいだろう

『あの』ディアウス・ピターの行方も気になる…

「その任命、心より感謝します…」

『おいっ！！』

悪趣味なペンダントが五月蝿いが今回は我慢…敵はアラガミだけ

では無く、俺から見たら人間もなのだ
生き残る為には汚くとも結構…誇り高い騎士になりたい訳ではない

「フフッ…嘘も方便とはよく言ったものですね？」

「ばれてら…いいけどね、別に。」

とりあえず、この任命を受けておく事にした…
何をするにも、後ろ盾やコネは必要だからな

―――――――――――――――――――――

「騎士カリム…」

「変にプライドが大きな彼です…最悪殺されるのも覚悟していたのですが…」

「…」

今回の彼の騎士任命…初めて聞いた時は暗殺か何かかと思った物ですが…

「予言の者は、彼でしょう…」

しかし、例えあれほどの力を持ってしてめ未だに天災レベルの問題を解決できるのが信じられない…
始めの頃は、問題児を預かる程度の気持ちだったが…

「神とは…彼の事を言うのでしょうね…」

何者にも平等に死を与える…アラガミは確かに人類のいや、生命

の天敵となりうる存在だ…しかし、『神』の名に冠する彼らを顔色を変える事なく葬る彼は正しく神の名に相応しい存在かも知れない…さしずめ彼は…

「天野　豊…豊饒神に当て嵌まりますね…」

「騎士カリム…」

「ごめんなさい…彼を見ていたら、神と言う存在を…人が依り所となる存在を再考させられてね…」

彼が、破壊神…ないし悪魔で無い事を祈るだかりだ
これでも、仮にも聖職者…頼りにしている者が破壊神ではとんだ邪教徒だ

「邪魔者は消えてが、ペイラーの子飼いも行方不明とはな…」

白髪の少年について私は考えていた…私がソーマを連れて彼を尋ねた頃には既に居た謎の赤子…友人から預かり子と聞いているが…

「なんにしても、不確定要素は消えてしまったか…」

私は、未だに迷っているのかも知れない…多大な犠牲を払う程、自らの使命は尊いものか未だに信じられないのかも知れない…

「馬鹿らしい…さて、仕事が山積みだな…」

私はまず、目の前のかのチョモランマ程に積み上がった書類を片付ける為に尽力する事にした…

第三喰　任命と迷い（後書き）

（つ＿＿）つ…．，。ｚＺ

第四喰　失敗と凍土（前書き）

なんだかんだで、難易度９までクリアしてヘラの服を作りました…まだ変態の域には達しないけど、頑張るっ！

陰険でピザだけど根はいい奴なダチが一人で１０まで行った時には驚いたな…人間？

では、本編をお楽しみ下さい…

第四喰　失敗と凍土

魔力素を常時捕食している俺は、時間を追う事にその魔力量は増加していく…
普通の神機使いなら対した事ないだろう…せいぜい小腹が減らなくなる程度ですんだろう
だが、体の大半…内臓までオラクル細胞と化している俺には辛い…
食い過ぎな気分だ
だから、たまに…

「うおらぁー！！！」

ガガガガガガガ…

ストレス発散と言わんばかりに弾丸を乱射する…機関銃のように打ち出される紫電の弾丸は、鋼鉄の甲殻を持つ巨大な蠍に吸い込まれていく…何故こんな事になったのか…それは約１５時間後前に遡る…

―――――
――――
―
――――
――――

「銀色の蠍の怪物って…ボルグ・カムランだよな…どう考えても。」

騎士に任命されたからって特にやる事は変わらず、アラガミ共の発生源を探したり帰る術を探している…いま有力な候補は、『ジュ

エル・シード』と言うロストロギアだ…最も、見た事ないから分からないけど
　因みに、俺の神機の弾丸が魔力由来なのを理由にごり押しで管理局は質量兵器かどうかは捩伏せた…元の世界ではオラクル細胞を飛ばしてたからな…ちと痛い
それよりも問題は、ミッドチルダのような世界にはよくある旧市外地に出没する大型アラガミだ
やつら、人間も物質も構わず喰ってしまう…揚句、魔力弾も高い収束率で無い限りは捕食するから質悪いんだと
俺としてもアラガミに喰われる人は気の毒だと思う…文字通り捕食する為、死体も残らないのだ
それを利用して擬装工作かまそうとした先輩いたが止めといた…誰かを泣かしてまでやる価値はあるのかと

『にしても、いないなぁ～…ああ、新鮮なオラクル細胞が喰いたい。』

「激しく同意…あ、今俺アラガミ寄りの考えだった…鬱だ。」

　捕食を求める＝アラガミは少し偏見かもしれないが、今の彼の姿は正しく欠食児童である

ごぅん…ごぅん…

「噂をすれば影…だったかな？」

『本当に旧文明の言葉好きだな。』

「じゃかぁしぃ…」

ボルグ・カムラン特有の金属質な足音が聞こえる…ここいらにスラムはないから間違いなく奴だろう…

『嬢ちゃん達が邪魔をしなければすぐに終わるな。』

「ああ…自重ももはや支えられない感じだ。左前足にひびが入ってる…砕けば大半の攻撃は潰せる。」

ボルグ・カムラン…金属の甲殻を持つ巨大な蠍は、多彩な間合いと硬さに定評がある
初めて会った時は流石に泣くかと思った…一人だったから泣いた

「んじゃ、一丁楽しいお仕事の時間d…」

「ディバイン…バスター！」

『終わったな…お前の作戦…』

「帰るか…あの脳筋、痛い目みたら引き返すだろうし。」

空からボルグ・カムランに降り注ぐ閃光は、頭部付近の甲殻に弾かれて霧散…捕食されてひび割れた前足は修復してしまった…魔力素が薄くなっただけなのね
つまり、アイツのオラクル細胞は魔力素に対する何かしらの対抗策…食い過ぎないように偏食因子を組み替えたのだろう

「厄介だな…回復したじゃんアイツ。」

『仏の顔も三度まで…もう三回使い切ったから管理局は助けなくていいだろう。』

「激しく同意。」

とりあえず、見守る事にした…今覚えば変な意地張らずに出たらあんな苦労はしなかったろう

―――――――――――――――――――――――――――――

「やっぱり固い…」

旧市外地に出没した未確認生物の調査できたのだけど、相手は見た事の無い生物…もしかして、アラガミなのだろうか？

「とりあえず、アクセルシューターっ！」

牽制の為に放った魔力弾は、全て相手に弾かれる事なく「吸収」された

弾いたのではなく吸収…普通では考えられない事だ

『グォォアアア！！』

「え？きゃっ？！」

蠍が口を開けると中から鉄杭を複数吐き出す…それはなのはのプロテクション…防壁をいともたやすく突き破り、レイジングハートを持つ左手を掠る

『グルルル…』

「く…何なのアイツ…生半可の相手じゃ無い。」

レイジングハートは、敵を挟んで反対側のビルの影に落としてしまった…左手は鬱血し、明日にはグロいことになるだろう

「どうしよう…私、死んじゃうのかな…」

この任務を任された時、発行者が陸の将軍…レジアス・ゲイツと聞いたときにはきな臭い物を感じていたのだ
たが、持ち前の責任感がこうも仇になるとは…なのはは、目の前に家族や友達との思い出を走馬灯に見、涙が自然に零れる

『グォォアアアッ！！』

気が付いたら、目の前には先程の蠍…体の表面に電気がパチパチと流れ、咆哮を上げると同時に鋼色の甲殻が金色になる…ああ、私死ぬんだとなのはは思い、ゆっくりと目を閉じる

「どうも、来来亭ですっ！ご注文の冷麺お持ちしましたっ！！」

尾の針が目の前で振り上げられると、その針の付け根に弾丸が辺り狙いが逸れる
なのはの横、１mを針が過ぎて地面を穿った

――――――――――――――――――――――――

冗談でも言わないとやってられない…最初はただのボルグ・カムランだったのに気付けば、悪趣味な金色の甲殻を持つ「堕天種」になっていた…意味わからない、博士説明してよ

「たく、おいあんたっ！さっさと逃げて隠れろっ！！激しく邪魔っ！」

「ふぇ…え？」

普通に女の子されても今はうざいだけ…こいつを早急に片付けないと大変な事になる
金色のボルグ・カムランは、雷の力を使う堕天種だ
その攻撃範囲は、普通種に比べ天と地の差を持つ

「ああもう…こっちこい成金蠍っ！」

『グラァァアッ！！』

言葉を理解したのか怒る成金蠍…バレットを普通種対策の氷結属性から炎属性に変更して後退しつつ撃ち込む
狙いは蠍の鋏にある盾だ…あそこを壊せば大分楽になる
結合破壊報酬？人の命に比べれば安いもんだよ

「あぁ…もうかてぇっ！！」

『刀身を破砕系に変えるか？』

「もちっ！！」

とりあえず、彼女から引き離す事だけ考えたからペース考えてなかった…辛い

「これなら…どうだっ！」

『ギャァアアア？！』

赤い刀身の鋸…強化ノコギリ改と呼ばれる剣を敵の顔面にたたき付ける…刀身変えるのかなり痛いからやりたくないのに…これもアイツがボルグ・カムランに喧嘩売ったからだ
ネチネチと文句言ってやるっ！

『大丈夫か…刀身変えるの辛いだろ？』

「内側から太い針が何本も出て来るみたいに痛い…」

普通、神機を構成するパーツを交換するのは専門家がいるくらい難しい作業で現地で交換なんて普通できない
しかし、この色々と規格外な相棒はオラクル細胞から無理矢理作り替えてしまう…その分ダメージは俺に来るが

『でも敵はまっちゃっくれねえっ！』

「うぉっ？！」

こちらに飛び掛かるようにボルグ・カムランは跳ねる…クアドリガ程でないにしても硬い甲殻を持つこいつの一撃は重い

「ちっ…」

こちらのリズムを読んだのか、それを崩すように攻撃を仕掛ける…コイツ、適用しているのか？！

「辛いな…魔力砲とかぶっ放されたらなく程切れるぞ。」

コイツは純粋魔力砲に関しては吸収して回復してしまう…どこまでが上限かは知らないが、やるだけ無駄だろう
幸い、オラクル細胞を混ぜた魔力弾ならその毒素にやられてダメージは入るみたいだ

「よっと！！」

『グォォッ？！』

ステップから振り下ろされた大剣は盾を破壊して相手をのぞらけせる
体のあちこちから体液が飛び出ている様子をみると瀕死のようだ

「回復錠でも…のわっ？！」

『馬鹿っ！よそ見する奴がいるかっ！』

油断して相手の吐き出す鉄杭…雷撃を纏うそれは地面に着弾すると雷を撒き散らしながらえぐり取る
瀕死もあるのか雷撃にやられるだけに済んだ

「スタンっ！…で、回復球回復球…」

『まめな性格だな…』

改めてスタングレネードと言う閃光と爆音でアラガミの視覚と聴覚を奪う…それから傷を治す光を出す球を地面にぶつけて光をくぐる

「ファイナルラウンドってな…いっちょ行きますかっ！」

『やったれ相棒っ！』

紅黒い大剣を下段に構え、懐に飛び込み縦一閃、さらに突きを喰らわせ怯ませて、横一閃をした後ジャンプをし…

「とど…めっ！！」

『グッ…グォォ…』

脳みそをかち割られ、そのショックでひっくり返り腹を晒す…ボルグ・カムランが死んだ証拠だ…

「お楽しみの補食ターイム♪」

『ブァクゥ！！』

「デカァッ？！」

普段の補食形態ではなく、やたらデカイ口がカムランを包み丸呑みにする…何これ怖い

『偏食因子の採種完了、これで破裂する事はないぞ…多分。』

「…色々ツッコミたいけどいいか…それより。」

死体があった場所から踵を返して歩き出す…その姿はまるでかつての上司を彷彿とさせた

――――――――――――――――

私はただ呆然としていた…言いようも無い恐怖に襲われて大きな蠍を攻撃してしまった…
私の頼れる相棒と引き離され、殺されると思ったら私たちの元から消えた彼がいた
彼は私から蠍を引き離してから戦っているようだった…もう、自分の情けなさと無力さに腰が立たなかった…

「おい…」

「え？」

ジャキ…

なのはの目の前に突き付けられのは凶悪な歯が並ぶ凶器…それだけでなのはは畏縮してしまう

「なんで、あんな真似をした？」

「なんでって…その…」

彼はなのはが今まで…いや、親と喧嘩した時だけに一度兄に見た絶対零度…永久凍土のような視線をしながら質問した

「あのままお前がとんぼ返りしてくれりゃあ、傷ついたアイツを楽に狩れた…たく、これじゃ八つ当たりじゃねえか。」

「え、あ…」

彼はそのままなのはを担ぐと神機を左手に持ち、なのはをレイジ

ングハートを持った右手で支える

「とりあえず、戦域を離脱する…多分、あの蠍…ボルグ・カムランをあそこまで傷付けた奴が近くにいる筈だ。」

「…はい。」

なのはを担いでその場からダッシュする…一人なら未だしも彼女のような足手まとい込みでは無理だ

｜｜｜｜｜｜｜

豊達がその場から離れて３０分後…黒い表皮の大きなライオンがやってくる…

左目に生々しい傷があり、呪いのようにそれが脈動する…

『グルルゥ…グォォオオオ！！』

復讐の黒獅子は咆哮する…己の顔に消えない傷を残した者を探して…

第四喰　失敗と凍土（後書き）

なのはさんテンパるの巻…新人がテンパって撃っちゃってそのまま全滅（多分大吉カノンの事かと）したという話をストーリーの途中で聞いたのでそれをモデルに一話書く…まさにメシウマっ！

豊君は、対人の達人（戦闘民族高町家など）以外には基本的には馬鹿力でごり押し出来ます…まあ、人間かも疑わしいですが

【逃したので】主人公能力【補足】（前書き）

多分、今後言われる機会が無い為ここで大暴露…本編読んだ後の方が笑えると思う

【逃したので】主人公能力【補足】

～主人公～
名前：天野　豊（本名では無い）
コードネーム：Ｙｕｔａｋａ
年齢：１５歳？
性別：男性
身長：１６３ｃｍ
容赦：白髪、黒目の青年…見た目はモヤシだが
性格：自己紹介した人間には普通だが、しない人間はとことん他人扱いｏｒ無視という習性持ち…キャラの持ち味が欲しかったんだ…
　基本がチンピラ臭いが、実力は新兵だが既に少尉クラス（かなり強い）である
命大事に主義で休む時はとことん休む
楽しいことは好きで、仕事（狩り）は楽しみとは別扱いで好き
演習は不真面目ながら熟した

＞ｉ４８９６―５７０＜

←わかりやすいｆａｔｅ基準ステータス
色：紅・黒
属性：混沌・中立
真名：決めてません（＾＾；）

俊敏さ：Ｂ－
↓オラクル細胞由来
筋力：Ａ＋
↓オラクル細胞由来
仕切直し：ＥＸ

↓リンドウさん由来
精神汚染耐性：Ｃ－
↓オラクル細胞由来
変身：Ａ
↓オラクル細胞由来？
補食：Ａ＋
↓オラクル細胞由来
魔性：Ｂ
↓オラクル細胞由来

・補足と解説と言い訳
　強化パーツ使うと増えそうだよねスキルって
変身はオープニング後半で見せた荒神化から…もしかしたら狂化の部類だろうか？バーサーカーかな？
補食はいらないかもしれないが一応…もし、宝具を補食したから化け物化するじゃないだろうか…神機使いって
　スキルは思い付いた順に書いたのでバラバラです。

　ちらっと言ったかもしれないけど、彼の体を構成する細胞の大半…三分の二はオラクル細胞に置き換わっています。
もはや人間と言うより荒神に近いです。
ちなみに彼のメディカルは博士がごまかしています。バレたら大変だもの。
勿論、コアも存在しており、神機のコアとシンクロ出来れば旧型も使用可能

因みに彼のテーマは…
ａｌａｎさんの『Ｏｖｅｒ　Ｔｈｅ　ｃｌｏｕｄｓ』です。
私は私でいられますか特にね

〜神機〜
名前：スサノオ
性格：ゼロ魔のデルフを参考にしました
（＾＾；）
主人公より喧嘩っ早いかも
部類：可変式（新型）
コア：スサノオ（黒いアンチクショウ）
特徴：オラクル細胞を大量消費して刀身を変更できる変わった神機
　コアが不安定なのが原因と言われているが詳細は丸投げ中…いつか決める
大食漢な為、デカイ口で丸々と大型荒神を飲み干してしまう

　ネタバレかと思えば語る機会無くねと補足…言い逃したぜ
豊が言っていた『機密』とコアの事…第一種接触禁忌荒神使ってますとか言えないよ普通

本編もよろしく（・ω・）／シ

【逃したので】主人公能力【補足】（後書き）

ヤバイ…厨二病の臭いがプンプンしやがるぜっ！
第一部隊の人々の評価もいつか書きたいな…終わった後に平和な世界ｉｎＧＥ（捏造）とか面白そうだｗｗ

現在考えつく構想←
＊キャラ
・主人公が不良で優等生
・ペイラー博士が生物、物理担当
・ヨハネス（支部長）が切れ者の校長
・ツバキさんが教頭
・リンドウさんが人気の先生
・サクヤさんが校医
・ソーマが数学の先生
・コウタがウザイくらいに馴れ馴れしいが憎めないダチ
・アリサがロシアからの留学生でツンデレ…下乳属性消失と思えば私服がアレ
＊全体
グダグタな学生生活…高校二年の中頃にやって来た転校生のせいで主人公のほのぼの？殺伐の空気ライフが侵されるっ？！
主人公は無事に進級出来るのか（生活態度的意味合いで）！！

…あれ？こっちのが面白そうだ…

第五喰　暗躍（前書き）

あえて、短く刻んで修正しやすくするという姑息な手段を覚えました…

ごめん、最近思い浮かばなかっただけ（m__）m

第五喰　暗躍

機動六課隊舎…今、ミーティングルームで隊長陣が床に軒並み正座させられている
彼女らの前にはいつの間にか消え、騎士となった少年がこの場に永久凍土を作りかねない程の視線を容赦なく浴びせる

「あんたらさ…仕事嘗めてる？ビビったから撃ったとか新兵かよ？馬鹿なの？遊んでんの？」

「「「…」」」

勘忍袋がブチ切れ、マッハで消滅な彼は普段の毒を含んだ敬語ではなく苛烈な暴言となる…
彼の一面であり優しさであり、仕事に対する態度の現れである
彼は仕事に命と誇りをかけている…戦う事自体は惰性だが、結果としてはアナグラ周辺の外部装甲の強化に繋がっている…
ちなみにペイラー博士の至高の作品である『対アラガミ装甲』は彼の持つオラクル細胞の偏食因子から作られた…
時系列が会わない？色々あったんです

「なのはさん…あんた一回実家帰ってよく寝な？死ぬよ…隈ひどいし。」

「うぅ…」

「せやね、組合の人にこの間署名もろうたし休ませないと私の首が飛びそうだわ。」

「うそぉっ？！」

「ほんまほんま…ほら。」

「これは酷いｗｗ」

正座していたはやては脇から署名と彼女のシフトを引っ張り出す
…人間とは思えない鬼シフトである

「全く、上に報告書を上げなきゃいけないし…馬鹿の集まりだな。
この隊は…」

「滅相もないです…」

管理局としては他組織に手柄を取られた揚句、尻拭いまでさせて
しまい赤面物の大失態である
豊的に帰る術さえ見つかれば万事良しなのだが

「とりあえず、邪魔だから休め…どう考えても今のあんたは足手ま
といだ。休んで自分を見つめ直すべきにだよ。」

「はい…」

１５くらいのガキに言い包められる大人って何だよとツッコミな
がら席を立つ
魔力素を取り込んでから自在にサイズに変えられるようになった相
棒に嫉妬しながら部屋を出た

――――――――――――――――

「このように、アラガミはある日を境に急激に固体数を増加…オラクル細胞の恐ろしさをかんじるねぇ」

ここはフェンリル極東支部…通称アナグラと呼ばれる場所
地下深くに存在するペイラー・サカキ博士の研究室で行われている
新人向けの講義である

「さて、最近の私の研究テーマを少し教えてあげよう。」

「いいんですか？重要な事なら私達の首が飛ぶのですが…」

「ふむ、問題無いよ…それに君達も気にならないかい？豊…僕の息子、と言っても友人から託された養子なんだけどね？」

白髪の少女アリサと寝ていた少年コウタは跳び起きる…彼らも行方不明と思われた友人の行方を案じているのだ

「博士…あいつの行方わかったの？！」

「あくまでも可能性だけどね。」

「勿体振らずに教えて下さいっ！」

凄い剣幕で迫られたじたじになる博士…普段やる側だけに余計焦る

「まあ、あくまで仮説なんだが…真に受けないでくれよ？偏食因子を失って荒神化している…が一般論だが…」

言葉にするのを躊躇っているのか、一度区切って息を吸う…

「異世界にいったとしか考えられない。」

「待ってよ博士…そんなアニメじゃあるまいし異世界に行くなんて無理でしょうっ？！」

「そ、そうですよっ！」

博士の苦しい仮説に二人が反論する…博士の苦笑の表情を見ると本人もかなり無理な説だと自覚しているようだ

「私の所にも見つかったと言う知らせは無いんだ…アラガミにやられたとしか思えないが彼はな…」

理不尽に定評のある彼に限って死ぬ事はないだろう…

とりあえず、彼の帰りを待つことにしよう…たまにふらりと消えてしまうし

ああ…空が青い…

『相棒…』

ん？あの雲…蠍みたいだな…変なの

『相棒…』

「なんだよ…報告もちゃんとしたし、今は昼休みだろう？」

高町二等空尉を機動六課まで送った後、騎士カリムに報告して今教会の屋上にいる

『ここ数週間、相棒のコアを付け狙っていたアラガミ共がさっぱりと消えちまった…おかしくないか？』

かつて、ある者に『人間やめますか？死にますか？』の問いに人間やめるを答えた俺の三分の二はオラクル細胞で出来ている…その為アラガミの本来持つ器官…コアを俺も心臓の位置に持っている

これを知っているのは俺やスサノオとペイラー博士くらいだろう

「コアがないのにいるアラガミに、急激な細胞浸蝕に訳わからねぇ…泣きたいよホント。」

顔に腕を乗せ、天を見る…今日は憎たらしいまでに快晴だ

頬を一筋の光が伝った…

「実に…実にすばらしいぃ…」

暗い部屋…様々な機材に変な液体に満たされた水槽が並んでいた…その部屋の一角で、男がピアノのようなキーボードを使い、一心不乱に

モニターに齧りついている…

「各細胞での生命活動の独立…周辺物質の吸収による成長と無生殖…まさに芸術だ。誰がこんなものを作ったのだ？」

「ドクター、新たなレリックが回収されました。」

「すぐ行こう。」

この謎の生命体…意図して生み出されたものかそれとも…

「癪だが、使えるものは使わせてもらうよ…」

男は、稀代の天才科学者ジェイス・スカリエッティは端末と試験管から踵を返して部屋を出る…試験管の中には、アラガミのコアのようなものが入っていた…

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

第五喰　暗躍（後書き）

ペイラー博士にチート認定されていたおセンチな主人公とスカさん陣営に元にコア入りましたの巻

ああ…マブラヴかこっちのどちら消すか聞かれたらこっち消してしまいそうなくらいの曖昧さ…抹消したい

第六喰　成長と現実（前書き）

挿絵機能の実験も兼ねています…見れなかった人はドンマイ

キャラ紹介にもあるから、見比べるとおもしろいかも

第六喰　成長と現実

朝、騎士達と訓練を終えてカリムさんに呼び出されての一言

「単刀直入に言うと貴方を対荒神戦闘のスペシャリストとして次元管理局の機動六課に派遣します。よろしいですね？」

ガッデム…これが今話題の就職恐慌の僻害か…しょっぱい世の中だ

第六喰　パシリ

必要な荷物…と言っても、バイクに乗る程度な着替えくらいなので問題無い…地球で一斉風靡した名作ハーレー・ダビットソンのスポーツスター２０００…ナイトスターと言うバイクの積載量の半分も使わずに済んでしまった…しかし、あくまでレプリカなんだよな給料良いけど、次元世界自体が病的なまでにそういった物を忌避し過ぎる傾向…いや、管理局が勝手に…そう、身勝手な法で規制してるだけみたいだけど
おかげで足一つ確保するのも苦労する
そういった兵器や技術で繁栄、平和を保つ世界に漏れなく喧嘩を売っている気がするが別にいいか

「さて、そろそろ行くかな…」

黒塗りの車体に跨がりエンジンをかける…エンジンは、大気中の魔力素を取り込み動力に変換するタイプの旧式エンジンをバイク屋

の店主に安く提供して貰ったのだ
魔力変換時に重低音が響く素晴らしいエンジンである
いやぁ…バガラリーみるよりも壊れたサイクルを修理してバイクに出来ないかと頑張った知恵がここで生きるとは…
因みに、荒神対策に自分の一部を偏食因子を塗装剤に混ぜて塗装してある
さらに魔力タンクを小型ながら一機積んでおり、大気中に魔力素が無くとも5時間なら全力走行が可能だ

『しかし、見送りも無いとは薄情だねぇ…』

「堅苦しいしいいよ、それより早くはしりてぇぜっ！」

『だろうよ…お前はそういう奴だ。』

マイペースで悪かったな…さて、ミッドチルダ行きの便に間に合わせないと…
転移ポートは個人所有以外、殆ど管理局が牛耳っているから使いたくないし
晴れ渡る蒼穹を一台のバイクが疾走する…

―――――――――――――――――――――――――

「遅いね…」

「我慢なさい、大事なお客様なんだから…」

青髪のボーイッシュな少女であるスバル・ナカジマと山吹色の髪の悩める１０代のティアナ・ランスターは、ミッドチルダにある空

港…通称第八空港と呼ばれる場所に来ていた
四年前に突然の火災で全焼してしまったが、しぶとくこうして復活している
「今来た便にいるはずよね…白髪で黒い服としか聞いてないけど…」
「まあ、ミッドでも白髪は珍しいから大丈夫だよ…あ、あの人かな？」
白髪に黒装飾…まあ、黒いライダージャケットに黒革のパンツ、悪趣味な黒い髑髏のネクタイ止め…多分彼だろう
「機動六課から迎えに来たティアナ・ランスターです。」
「同じく、スバル・ナカジマですって…どこかでお会いしませんでした？」
白髪の青年は、ばつが悪そうに頭の後ろをかき、口を開く
「聖王教会から派遣された、ユタカ　アマノだ…えっと、約五週間ぶり？」
＞ｉ４９３１｜５７０＜
「う、嘘ぉ？！し、身長とか全然違うじゃんっ！」
「…まあ、美味いもん沢山食って、よく寝たら身長伸びるよ。」
彼の身長は当初、１６５ｃｍと比較的スバル達に近い身長だった…が、今では１７３ｃｍ程まで伸びている…足がすらりと伸び、顔

も幼さを少し残す程度の引き締まった造形になっている…皮肉にも教会でのアラガミ連戦は彼のコアを刺激して成長を促す結果になったのだ

適応変化…アラガミによく見かける特徴だ

例えば、シユウと言うアラガミは炎と氷に弱い…が、極地などに対抗して耐性が出来、白い雷撃を放つシユウに変化するのだ

彼の場合、皮肉にも多数のアラガミとの戦闘に対応する為に成長を早めるという形で『変化』しているのだ

見た目は１８歳程の為、バイクや各種特殊車両などの免許は取れるので取っている

「まあ、色々と事情があるんだよ…はっきり言って自分でもわからないんだけどな…」

「難儀な体質ね…行きましょう、空港から隊舎までの道知らないでしょう？」

とりあえず、ここで談義しても拉致が開かないと判断したのかティアナは先を急ぐ

「あ、ちょっといいか？愛車持ってきてるんだよ。」

特殊荷物受け取りのカウンターを指差し、ユタカは二人を誘う…

――――――――――

――――――

――――

黒塗りの鉄馬…力強い印象を感じるのがバイクである

エンジンから後ろに伸びる銀のマフラー…漆黒のカウルに威風堂々としたホイール
ユタカの愛車となったスポーツスター２０００ナイトスターはその雄姿を二人にさらす

「か、かっこいいっ！」

「高かったよ…管理局に検閲ギリでカスタムしたからなおさらさ～」

「それを新米とは言え、局員の前で乗り回すのはどうかと思うわよ…」

「硬い事言うなよ…後ろ乗っけてやるから。」
愛車を指差して二人に提案する…

「本当っ？！じゃあ、ティア乗りなよ。私はマッハキャリバーでついていくよっ！」

スバルは、新しい相棒をユタカに自慢したいのか早速起動する

【こんにちは】

「ああ、こんにちはだ…さて、ティア嬢…ヘルメット被りな。行くぜっ！」

「ＧＯ！ＧＯ！レッツゴーっ！」

「ま、ちょ…まちなさーいっ！」

軽快な音を立ててバイクとローラーブーツは走り出す…デバイス

まずくない？平気平気、市外地避けて行くので

―――――――――――――――――――――

比較的に見つかる事なく、問題無く事は運んで無事、三人は機動六課の隊舎に着いた

「何と言うか…想像より快適だったわ。加速最悪だけど…」

「わかってないな…新型の加速なんてロマンが無い。」

「よくわからないけど…まあ、改めて機動六課にようこそっ♪」

三者三様…賛否両論なバイクだが、概ね良かったみたいだ…セーフっ！

「ああ、改めてよろしく。しかし、悪かったな…そのいきなり消えて…」

「事情は聞いているから別に良いわ…ちゃんとした議論も無しに拘束しようとした主都防の部隊は未だに行方知らずだけど。」

「なにそれこわい…」

軽口をたたき合いながら隊舎に入っていく…肉体に引っ張られているのか、ユタカは始めの頃より余裕を持って彼女らに接する事が出来ていた…のちにこれが彼の評価を大きく揺るがす事になるのは、誰も知らない

第六喰　成長と現実（後書き）

食べ過ぎで太らず、背が伸びたでござるの巻

ユタカがアラガミに近い人間なのか、人間に近いアラガミなのかは、そのうちはっきりさせたいです。

次回、博士がまさかのデットボールっ！

第七喰　混沌の渦（前書き）

一応活動報告でも前々から言ってるけど、暫くマヴラブの方に更新を専念します…ロボ好きは見にいけい！！

◇３／１１：一部修正＋加筆

第七喰　混沌の渦

機動六課の隊舎に着き、部隊長に挨拶に来たら…

「ん？豊君のお兄さんなんか？」

「よし、アンタ表出ろ（＾・＾＃）」

思わず、顔文字が出て来る程に怒り狂った…うん、この人は軽率な発言が多過ぎるんだ

第六喰　混沌の渦

しこたま殴りたかったが、まあ女性に手を挙げてはならないと言うのを仕込まれた俺が本気でキレる筈も無く

なあなあに事は流れた…が

「まあ、結局のところ実力みたいんよ…だ・か・ら。シグナム…」

「はっ」

「模擬戦して確かめてみよか♪」

「馬鹿ばっか…」

やはり、この部隊長の頭は大丈夫だろうか？カリムさんが少々本

気目で心配していたが…

―――――――――――――――――――――――――

なんでこん～な事になるのかなぁ…
どこで、俺は選択肢を間違えた？

「さて、お前との模擬戦…楽しみにしていたぞ…烈火の将シグナム…いざっ！」

そういう訳ではなく、この人の趣味っぽいなぁ…なんでだろう？

「まあ、いいか…」

「それでは、模擬戦を開始します…ステージイメージは荒廃都市、勝利条件は相手のギブアップか相手を気絶させたらですっ！」

「いくぞっ！！」

アナウンスの担当は、リィンフォース・ツヴァイと言う子らしい…なんでも、ユニゾンデバイスと言うらしいがよくわからないな…誰か…イ〇スさんを呼んでくれっ！

「おいっ！真面目に戦えっ！」

「と言われましても…」

先程のモノローグの最中に模擬戦は始まっており、シグナムさんは切り込んでくるが、以前からの経験により刀身はショートの宝剣

楊貴妃だ…自重します
神から普通の奴には効かないし、見た目的に威圧も出来る
「反射を抜ない人に本気は出せませんよ？はっきり言って、半分以上は人間じゃないんで。」
「く…なら、レヴァンテイン！」
【ｊａ　Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ】
シグナムの持つ剣から薬莢が飛び出る…豊は、興味深げにそれを見る
強者の余裕である…油断ではなく余裕
態度は油断ではあるが、その瞳は常に分析を続けている
生き残るためには、相手を知らねばならないから
「いくぞ…レヴァンテイン、第二の姿…」
【Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ】
「伸びるのかっ？！」
誰が予測できるだろうか…剣が伸びるのだ
しかも、かなりとかのレベルじゃなくて、無限とも言える距離をだ
「（リーチによる差はほぼ、ゼロ…なら懐に潜り込む！）」
「やっとやる気にっ？！」
前方ステップからの突き…短剣（しかし、長剣くらいはある）の

鋭い切っ先がシグナムに迫る…冗談みたいな速度で繰り出される剣はシグナムの腰の鎧を抉る
砕けた鎧は魔力素に還元され、大気に霧散する

「凄いな…わずか数週で騎士になれたのも納得が行く。」

「続き…と言いたいが、お客さんみたいだ。」

機動六課は海に近い場所に存在している…だから、竜巻なんかが発生すると海上にある雲に動きが生まれ、天気が崩れるのだ

「あれは…山が動いている？」

「ウロヴォロスたぁ…中々な上物じゃねえか。」

ウロヴォロス…超大型アラガミに部類され、そのサイズは他のアラガミの追随を許さない
が、その体を維持するために大量のオラクル細胞とコアを必要とする為に個体数はさほどでもない
（が、作者は素材ほしさにただいま乱獲中）

「なによあれ…化け物じゃない。」

「酷いなティア嬢…アレでも俺の同類だぜ？」

ウロヴォロスの凶々しさに押されているのか皆、本音が駄々漏れている…
初見の頃が懐かしい…今じゃ、脳筋戦法でも勝てるしな　ｂｙ作者

「…どういうことよ？全然、完膚なきまで造形的に、生態的にも違

うじゃない。」

「俺もアイツも、コアがあって、オラクル細胞で体を構築している。さすがにあのクラスになるとコアは存在するみたいだな。関心関心…」

正直、体の維持にコアの存在は欠かせない…俺は生命活動の７０％をオラクル細胞に頼っているから、コアの磨耗が激しいのがネックだ…ああ、普通が羨ましい

「んじゃ、対アラガミ戦闘の講義でも始めるかな…ま、受講料は命ってとこか…」

魔力由来の攻撃でも、コアに対してなら大いにダメージは望める…今のうちに、こいつ等に教えるかな？まあ、俺が帰ったら消えそうだけど…

「さて、とりあえず言う事は三つ。生き残れ、やばくなったら隠れろ、んでもって敵が隙を見つけたら迷わず葬れ。」

「なんか、アバウトだね…」

「細かいのは後から補足するが…基本はこんなもんだよ。生き残る為に戦っているのに死んだら意味ないだろ？」

「あ、あはは…リアルだねぇ…」

スバルにツッコミは的を射ていない…未だに敵の戦略を把握していないみたいだ

「アニメじゃないんだよ…俺達は戦争してんだ。人間対星の壮絶な戦いをな…さて、皆ウォームアップがすんだみたいだし…解説しますかね。」

「「「「お願いしまーす。」」」」

コイツら…やる気あんのか？まあ、いいが勝手に死なれても構わんがな

「ウロヴォロスは基本的に遠距離から狙撃で頭部の複眼狙いで行くのがベストだな。他にも脇の四本の脚を攻撃してダウンを狙うのもありだ…幸い、こちらには優秀な突撃兵が二人も居る…が、生かすも殺すもティアナ、お前にかかっている。」

「…え？」

話を聞け…今の話を聞いていたら大胆わかるだろう？

「いいか？二度も言わない、アイツの動きを封じれるのティアナ…お前だけだ、このメンツでウロヴォロスに狙撃をかませるのはお前だけだ。スバルの馬鹿砲も有効範囲に入らねば意味がない。アイツはそれだけ強いんだ…やれるな？」

「そんな…いきなり言われても…」

うだつが上がらない奴だなぁ…

「テメェ…やる気ないなら帰れ。頼られてんだぞ？任されてんだぞ？自信が無いなんて言っていたらいつか馬鹿をみるぞ？」

「うぐぅ…」

「相手が自分より強いのは必然、それをひっくり返せるのが戦術と連携だ。じゃなければ、俺達は即効で滅んでらぁ…」

神機開発も、偏食因子技術が無ければ無かった…人類は今、危うい立場にあるのだ

ヘラやポセイドンのような原種に対抗できる神機使いが少ない今、新型一機を失うのも痛い筈だ…

フェンリル本部の現状でさえもあまりよろしくない以上、今すぐにでも帰りたいのを我慢して班長のマネ事をしてるのもストレスでマッハなのにこやつは…

「…いいわ」

「…ん？なんだ？声が小さいぞ？」

「やってやるっ！アイツの顔面くらい、私の弾丸が風穴を空けてやるわっ！」

やる気が出たみたいだな…うし、これで勝ちは拾えるな

管理局が軍治的思考が強い連中で助かった…トーシロのコウタを教育するよりマシだぜ

――――――

―――
―

「作戦は簡単、ティアナをキャロがブーストして威力強化に全フリしてくれ、相手は魔力吸収出来ないみたいだし、なにより動きが遅い、脚を撃ち抜いてダウンさせ、エリオとスバルが特攻…破砕が通る両足がベストだが、無理はするな。踏み潰されるのがざらだ。」

「「「「了解っ！」」」」

本当は、顔面狙いで撃ち抜き続けた方が楽なのだが、このメンツでは射撃の総火力が足りない…俺も参加すれば楽勝だが、それでは意味が無い…派遣目的はあくまでも教導だし…楽したい

「さて、目標タイムは15分…非殺傷設定は切っておけ…相手が悪すぎるしなにによりサイズ差を考えたら無意味だ。」

短期決戦…慣れたらソロ5分切りとか楽だが単なる火力バカな戦い方だ…アンプルケチりたいんじゃないんぞ？

「では、状況開始っ！」

皆四散して行く…公式階級は新兵だけど、実際は本部からは小尉相当の権限が受託されてるし…アーク計画とかきな臭いのを調べるにしてもな…博士絶対知ってるけど、わざと黙っているよね？

―――
―――
―

「雷の精よ…狙撃手に汝の雷を貸したまえっ！」

キャロがティアナに攻撃力上昇ブーストを施す…雷とは古来から力の象徴、ギリシャの絶倫…げふんげふん、全能神ゼウスでさえも雷を武器とするほどだ

『いいか？一発の収束砲撃つより、小型弾を特定の部位に叩き込め…貫通したところで大気中に霧散した魔力素で回復されるのがオチだ。』

「クロスファイア…」

辺りに7個のスフィアが生まれる…何時もは二丁のクロスミラージュも演算重視にする為に一丁だ

直射砲とは言え、特定の部位に弾丸を確実に命中させるのは至難の技だ…

ヴァジュラを例にするなら、エイムモードで頭を狙ったのに前脚に『吸われる』みたいな感じ

初心者には一度試してみて実感してほしい物だ…

「シュートっ！！」

「行くよエリオっ！」

「はいっ！」

ティアナが狙ったのは前脚の間接…比較的に狙いやすく、脚の組織も先端部に比べて固くダメージも期待出来るからだ

『ぐぉぉおおん?!』

超純度のコアを狙っていたウロヴォロスとしては正に不意打ち…怯んでのぞける

「リボルバーナックルっ！」「ストラーダっ！」

リボルバーナックルはローター部が唸りを上げて回転し、脚の組織を引きちぎり、ストラーダの飛び出たジェットエンジンみたいな部位から大量の噴出炎を上げて顔面に切っ先を突っ込み、引き抜いて離脱する…一瞬で複眼と両足を結合破壊しましたよこの二人…怖っ?!

「やるぅ…んじゃ、ここは任せて良さそうだな…」

「ち、ちょっと何処に行くのよっ?!」

「ん? お忍びでデートに誘われてな…早く来ないと暴れるって癇癪起こされてて困ってるんだ…んじゃ。」

「ああ…もうっ！あ、エリオっ！スバルっ！もっと距離を取り成さないっ！」

「わかったっ！」

「すいませんっ！」

うん、まかせて良さそうだな…ティアナは性格に難ありだが観察眼が優秀でなによりだ

――――――――――――――――

訓練所に使われているエリアの南西…あらかじめ、隊長陣には下がっているように伝えてある

過保護も成長には悪くないが、行き過ぎるとただの毒だ

「さ～て、今回のデートの相手はっと…おおっ！ウロヴォロス堕天種か…比類無きご馳走だね…俺の世界じゃ未だに貴重だから、博士にコアを持って帰ったら喜ぶぞ♪」

市外地を闊歩するのは白い巨体のウロヴォロス堕天種…通常の種に比べてその固体数は未だに一割を切るほどだが、これは珍しい…誰かが弄って生み出したか？別にいいか…

「さて、一丁おっぱじめますか…」

『グォアアアアアア！！』

武装は刀身が宝剣　楊貴妃改に銃身インドラ改…装甲が硬属性バックラー…某害宇宙由来の地球外生命体にすら勝てるよねこれ？少なくとも、重〇級を補食後薙ぎ払いを繰り返すだけでもかなり楽な気がする…はっ？！俺は何をっ？！

「これが…アーク計画…」

――――――――――――――――

「なんですかこれ…ふざけてますよ。選民思考なんて今更流行りま

せんよ…」

リンドウと新人の敵…ディアウス・ピターをなんとか倒した私達は、奴の体から回収した腕輪である資料を読んでいる…

通称『アーク計画』…俗称で『ノヴァの終末補食』を人為的に起こし、地球を再生…選ばれた１０万人は宇宙に逃げ、補食を終えてアラガミの滅んだ清浄な地球に無事帰還する…

確かに、人類を生かすには確実かもしれないが…

「こんな…許される筈ありませんっ！サクヤさん、リンドウさんの意志…継ぐんですよね？」

「そうしたいけど…ここが潮時ね…」

「そんな…」

「この資料には、誰がリンドウを殺したかなんて書いていない…つまり、リンドウも彼も、それを認識仕切る前に潰されたという事は、この極東支部全体も危ないのよ？このターミナルすら危ないのよ…そんな相手に勝てる？」

「うぅ…」

サクヤは常々感じている…彼女は変わった、いい意味で

不謹慎だが、死んだ彼の影響かも知れない…アリサは彼死んだ日からを見続けている『夢』を糧として力を付けてみたいだ…内容は壮絶極まりないが

「彼は…多分生きています。博士も、たまにふらりと出かけては帰ってくるって言ってますし。」

「だと良いけど…さて、宴会の準備しましょう…弔い合戦に勝利した…ね？」

「はいっ！」

―活動報告―
ミッション名：野獣の黄昏
討伐対象：
◇ディアウス・ピター（ヴァジュラの新種）
◇プリヴィティ・マータ（ヴァジュラ種の雌と見られる）
帰還所要時間：９時間半
討伐班：第一部隊
◇アリサ・イリーニチナ・アリエーラ
◇ソーマ・フォン・シックザール
◇橘　サクヤ
◇藤木　コウタ
討伐内容：
◇プリヴィティ・マータ：今作戦の目標であるディアウス・ピターとの合流させないことをを目指す為にコウタが先行し敵を挑発し誘導…
そのまま反対側まで誘導し討伐
◇ディアウス・ピター：討伐班の証言では頭部と前脚に斬撃が通りやすかった
後、神属性がよく効いたとの事
特記事項：ＭＩＡ（行方不明判定）であった『雨宮　リンドウ』の腕輪と神機、そして、同じくＭＩＡである『天野　豊』の左の服の袖と神機の刀身を発見、今後この二人をＫＩＡ（死亡判定）とする

「成る程、ペイラーの子飼いは死んだか…が、油断は出来ないな…」
あのペイラーの子飼いだ…何をしでかすかわからない…生首見せられても安心なんてできやしない
「まあ、『アレ』が完成すれば杞憂は改善…されないだろうな。」
非公式記録ではウロヴォロスのコア剥離にも成功したらしい…諜報の手を本部に延ばしたのは正解だったな…都合よく本部のリンドウも始末出来た、なによりも彼は知りすぎた…子飼いの方はわからないが、始末できたのは大きい…
「支部長…調整中のアレが最終調整に入りました…」
「オオグルマ君か…わかった。すぐに行こう。」
今は戦力の充填に力を注ごう…世界各国の原種達の動きも気になるし、なによりペイラーが最近、不振な行動を取り出したな…ばれてないとでも思っているのか？
まあ、この勝負…私の勝ちは揺るぎないがね

「博士、シオについてやけに詳しいよな…なんで？」
「うむ、その質問は私の予想より８６２秒早いなコウタ君…まあ、早い話が彼女とよく似た者と知り合いなだけでね…正直、彼にはいつもヒヤヒヤしているから扱いに関しては細心の注意を払っていたかいがあったものだよ。」

対アラガミの拠点…フェンリル極東支部のラボラトリフロアの最奥…ペイラー・榊博士の部屋で入り浸っているのはコウタとアリサの二人である
シオとは人型アラガミの愛称である…人類の砦に敵であるアラガミが居るのはなんともシュールだが…

「アリサー、もっと夢の話聞かせてー」

「俺も気になる～」

「君達、意外と順応早くないかい？」

夢の話とは、ミッションの蒼弓の月で豊が消えてからアリサが見るようになった奇怪な夢だ…
内容は、誰かの幼少期から始まりペイラー博士と出会い、見たことも無い黒い神機…シオとは真逆の色をした神機で数多のアラガミを補食して行く話
中にはアリサ達も出会ったことの無いアラガミも倒して補食している為、今ではアリサの対アラガミ戦闘の教本状態だ…戦い方がとにかく効率的かつストイックなのが彼女の心を捉えたみたいだ

「えっと…では、赤いシユウの話かな。暑いところとオウガテイルを好むみたいで、たまに寒いところに行って極地適応の堕天したオウガテイルを補食しているみたいです。」

「それは『セクメト』だね。固体数は少ないし、活動は今は活発化していないから会うことは無いだろうけど…とにかく手強いらしいよ。何せ、光弾の追尾性能が向上していて、攻撃力、耐久性は他のシユウ種の追随を許さないみたいだよ。」

「へぇ…で、博士はなんでそんな事をしっているのさ？」

「博士なんでも知ってるなー」

「博士だからね…まあ、本部に居た時に一度研究していただけさ。」

疑問＋疑惑の目を向けるコウタに純粋に尊敬？をするシオ…実にわかりやすい構図だとペイラーは考えていた…彼が消えてから約半年、まさかこんな事になるとは考えていてもみなかった

「なんだ、意外と普通…でさ、結局黒い神機使いは倒したんだろ？」

「ええ…白いナイフで羽を削るように切った後、白い銃身のスナイパーで蜂の巣にしていました…弾丸が上から下へ落ちて当たっていまたけど…」

「ああ、ミサイル系の応用だね。彼は勝つ為には手段選ばないからね。参考にしとくといいよ…ああ、固有名詞を出すのはやめたまえ。」

なにかを恐れるようにペイラーは両手を上げる…いろいろ面倒だもんね

―――――――――――――――――――――――――――――

「ああ、しぶとかった…めんどくせぇなぁたく…」

ウロヴォロス堕天の死骸に腰をかける…コアを摘出したから後数

刻で消えるだろうが

「こりゃぁ、ダブルブッキングとかいうレベルじゃねえよ…」

後ろからゾロゾロとウロヴォロスがやってくる…ところどころ溶けているところを見るとコアを失ったか、元から無いのだろう…

『ふぁぁ～ん？馳走がいっぱいじゃねえかっ！』

「起きたか…まあ、お前からしたらそうだろうね…だけど、あいつらコアがないから砂糖細工みたいなもんだぞ？」

『残念…まあ、オラクル細胞でも貰いますかね。』

「んじゃ、久々に本気を出しますか…シンクロ率上げてくぞぉ～」

『ういういい、第一接続はすんでいるから第二、第三接続からいくぞぉ～』

接続とは、神機と神機使いとのシンクロに必要な物…
これの適合率が高くないと、神機使いは神機に『喰われる』のだ
普通の神機使いなら、第一接続終えただけで一丁前、良いレベルが、その後にまだシンクロの可能性を残している
トリガーハッピーが良い例だ、アレは第二接続に相当し、被ダメージが向上する変わりに、オラクル細胞の生成を増加させる
荒神(コウジン)化は、全身のオラクル細胞を活性化して行う…やることは第二接続相当だが、効果は第三接続…つまり、人間をやめる事を意味している
詳しくはいずれ…

『「さて、楽しい戦争の始まりだっ！」』

ここに戦争屋が居る件について…

―――――――――――――――――――――――――――――

『どう思う？』

それは異様な光景であった…様々な種のアラガミが集まっているのだ

それも、縄張り争いではなく和やかな雰囲気…まるで人間の地域の老人会のようだ

『どうもなにも…人間が作った奴が原因だろう。どうおもう、ヘラ？』

『私も同意見だ…アイツは力を求める傾向にあるからな…』

『全てのアラガミの祖…『アダム』。まさか、本当に人間社会に溶け込むとはな…天晴れだ。』

『褒めてる場合ではないぞポセイドン…人間は成長途中で認識も薄いアダムを葬ったのだ…もはや、情けは不要では？』

彼らは『元老院』…全てのアラガミそれぞれの『原種』の集まりであり、世界を現在管理しているのは彼らだ…彼らは今、中々面倒な事を話し合っているらしい

『まあ待て…気分屋のアダムの事だ。どこかで遊んでいるんだろう。

』

『スサノオ…だが、事は一刻も争うぞ？もし、『イヴ』が先祖返りしていたなら目も当てられない…また、世界は滅びるぞ？』

『ポセイドン…今回のアダムは今までとは一味違う。イヴの一部を持っている…それに私の分身が護衛にいるのだ…他の星は滅んでも、アイツが死ぬことは万に一つも無い。』

よくわからないが、議会はこれでお開きのようだ…

『ああ、それから皆の衆…うちの若いのに調べさせたが、『シオ』なるアラガミはイヴではないらしい…これは面白い事になってきたぞ？』

一番高い位置で陣取っているアラガミ…『ゼウス』は皆に良いことのように事の次第を説明した…

『そうか…なら、まだ焦るまでもない。たとえ終末捕食が起こっても、アダムで対抗出来る…まだ、この星の再生には早すぎる。』

『『『『『全ては母なるガイア、ひいてはその子等の為にっ！！』』』』』

彼らが表舞台に出ることは無いだろう…彼らの存在は未だ、人類には認知されていないのだから…

第七喰　混沌の渦（後書き）

さらりと独自設定と主人公不在状態でゲーム本編進行中…
コレくらい厨二病でも良いよね？

訳あってアンケート～修正版～（前書き）

なんか、支離滅裂だったので一部修正…

訳あってアンケート～修正版～

今回は、小説ではなく…かと言ってオワタ＼（゜∀、）／お知らせ…でもなく。
何かと言ったら今後の展開の相談でございます。

感じとしては、適度に壊しつつ原作に順じた流れを予定していますが問題はその後…内容の構成です。

1、とにかく無双する。負け？　勇者に敗北は許されない！！
2、適度に負けつつ勝ちつつ…無難にいこうか
3、残念だが…俺は後二回変身を残しているっ！！（荒神化的意味合いで）

の三つです。
ついでに、小説が終わった後は漫画版のGEでも終わった後にやろうかと思います。
テーマは『人間対アラガミのガチバトル』で行きたいなと…
主人公がどちら側かって？それは読者がこの話を望んだ場合のみわかります。

しかし、その前に学園GEをやるかも…一話限定で

では、いずれまた会う暇で（・ω・）ノシ

訳あってアンケート～修正版～（後書き）

ちなみに…
1は王道で対策取られる前に潰す
2は残念、スカさんに対策取られたよ
3はネタ…

でございます（、皿、）ニシシシ

第十二話　悪鬼咆哮（前書き）

シリアスにやるから茶化さないように……

かつて、人間も人の知りえる過去の歴史よりさらに昔の話……
この星には海しかなく、『旧支配者』がこの星に住んでいた
彼らは原初の海に生き、狂気と野生がこの星に跋扈していた
そんなある日、遠い宇宙の彼方か何処かからか、『旧神』が現れ
この星にいる『旧支配者』達を宇宙の彼方に幽閉してしまいました
しかし、星の位置がずれたりした時、彼らは目覚め、人は狂気に
食い尽くされるだろう

はい、以上で秋永のなぜなに★クトゥルフは終わり……後は前話
の補足が入ります

第十二話　悪鬼咆哮

戦い……いやは『食事』は熾烈だった
ウロヴォロスの物量的な波状攻撃を回避し、尻尾の剣で凪ぐ
オラクル細胞が大気中に存在しない為その姿は、黒い鎧の姿からよりモデルのアラガミ……スサノオに近い姿になっていた……手足はスサノオの足のように……顔は、黒いスサノオの顔のようになり、薄紫の光を放つたてがみが伸びる

『喰いごたえがないし、もういないな……さっさと帰るか。』

砕けるように甲殻は消え、元の姿に戻る……足元には黒い水のようになったオラクル細胞が貯まり、待機中の魔力素を吸い、許容量を超え崩壊していく

「俺も……コアが無くなるとこうなるのか……」

【そうだ、奪われないように気をつけるんだな。】

やれやれと歩き出すユタカ……その背後に二人を監視するものに気がつかないまま

――――――――――――――――――――――――

「成る程……オリジナルはオラクル細胞をあえて取り込み、暴走寸前まで力を引き出すのか……なら何故オリジナルはオラクル細胞を取り込んでも暴走を……」

暗い研究室で、男は端末とにらめっこしていた……男の名はジェイル・スカリエッティ……希代のマッドサイエンティストと言われるが、彼には目下の問題があった

【オラクル細胞の増殖と制御】

彼のスポンサーが依頼して来た内容であり、最近の彼の研究テーマでもある……スポンサーと意見が一致したのは初めてだなと彼は嘲笑しているが

「やはり、失敗作でもオリジナルの全力を出すには力不足か……かと言って、ナンバーズでも結果は見えている……くそっ！！」

机を両手でたたき付け、ストレスをあらわにする……生命体の限界を遥かに超越した存在に、彼は己の無力を呪った

「こうなれば……そうだな、正面からぶつかる必要はないんだ……」

スカリエッティは、己の中での禁じ手を一つ破ることにした……ナンバーズをオリジナル『ユタカ　アマノ』にぶつけると言うものだ

彼の非活性時の『人間』のサンプルはいくらでも手に入る……彼の入院時の物があるからだ……が、彼の活性時の『神殺し』としての物は存在しないからだ

なら、多少強引にでも手にしなくてはいけない……彼は、頼りたくない『スポンサー』に連絡する為に端末を手にとった

――――――――――――――――――――――――

ユタカは、残留オラクル細胞の池と化した訓練場を歩いて進む

彼を狙うアラガミを誘い出しをしているのだ……解っているのは三つ

・オラクル細胞はこの世界に『何故か』存在する
・そのオラクル細胞は大気中の魔力素を貪欲に取り込む
・この世界のオラクル細胞は、『あちら側』に近いようだ

「面倒を通り越して、もしや……いや、『敵』がいるのか？　それとも……」

俺達の……ゴットイーターの『本当の敵』に踊らされている奴がいるのか？
卓上の空論とわかっているいるものの、考えずにはいられなかった彼らの一部……末端の末端が起きていても不自然ではないが、本格的な活動が始まるには早すぎる
なら、答えは一つだろう……

「『ナイアーホテップ』か『オールド・ワンズ』かは知らないが……まあ、焦っても仕方無いか。　何であろうと、『敗北』は許されないんだからな。」

俗に言う『旧支配者』と呼ばれる連中は、ユタカと関係があるようだ……すっかり深夜になってしまったミッドチルダ、機動六課の隊舎に戻ったらなのは達に帰りが遅いととことん怒られたとさ

第十二話　悪鬼咆哮（後書き）

次回からまじめに書くよ……てか、今作者はマジ大学一回生なので更新と交信が遅れると思うが魔神眼石とか探しながらおまち下さい

後、今後独自解釈が続く予定なのであしからず。

【本編の整理】アラガミ教室★一時間目【兼ねています】（前書き）

すっごいひさしぶりの更新スイマセン、アグスタの話を書いているのですが、導入部が上手くいかんので、冷静になるためにこんな回を思いつきました

【本編の整理】アラガミ教室★一時間目【兼ねています】

「ユタカとお～」

「秋永のぉ～」

「「アラガミっ教室ぅ～！！」」

わーわーぱちぱち

普段ならペイラー・榊博士の研究室を借りたかったのだが、生憎大事な研究の為に借りられなかったので

「上（最高評議会）に圧力かけて、暇な機動六課のミーティングルームをお借りしました♪」

「（おかしいやろ……いきなりラスボスに圧力かけるとか何をしたんや作者さん）」

もはや、道理や手段を選ばなくなった作者……主人公の豊（ゆたか）は、享楽主義な為そんなに気にしないようだ

「えぇ～一時間目の授業は、『オラクル細胞って何？』です。　ネタ的に扱いやすいだけの便利な細胞と思った貴方っ！！　秋永先生が詳しく教えちゃう♪」

「きんも……」

基本的にマゾな秋永には通用しないのか、完全スルーされる真性ブラコンの『ティアナ・ランスター』……そんな彼女を相棒の『スバル・ナカジマ』が宥める
秋永がメインで豊はそのサポートのようだ……豊は、人の物を教えるのが好きなのか、質問に答える為にテキスト代わりの冊子を熟読している

「さてはて、いきなりだが皆は『ガイア理論』という言葉は知っているかな？」

「はいはいっ！　確か、大地の女神様ですよね♪」

元気に答えるキャロ・ル・ルシエ（幼女）の回答に、微笑ましいもの見るように秋永は答える。

「神様としての意味合いは会っているけど、今回は少し違うかな？
ガイア理論とは、生命体が住む星は、その星で一つの生命活動のようにサイクルが完結しているという話さ。」

「じゃあ、このミッドチルダも当て嵌まるんですか？」

「そう、だが今回の問題は、あくまで引き合いに出しただけだから、そんなに気にしなくてもかまわないよ。」

ティアナの発言に、乱視改善用のメガネをくいっと上げながら答える秋永、豊は無言でスライド用のプロジェクターを引っ張り出し、いつのまにか持ってきた小さなホワイトスクリーンに映し出す

「さて、『オラクル細胞』とは『自ら考え、捕食しながら成長する単細胞生物』の事だ……このように、最初はこんな顕微鏡を使わな

きゃ見えない程小さな存在だった、がっ！！」

カシャコっとスライドが変わり、獅子の様な生き物『ヴァジュラ』と、鳥のような腕を持つ生き物『シユウ』が写される

「僅かの期間で、彼らは人類を脅かす危険な存在『アラガミ』に早変わり……既存の兵器は効かず、対アラガミ用生体兵器『神機』が生まれるまでの期間、人類はピーク期は１７万程死んでしまったらしいよ。」

「最も、その神機が生まれても、あくまで『対抗』出来るようになっただけで、アラガミに『勝利』出来る訳でも無いんだがな（おまけに、その後に厄介な連中が控えているし）。」

「「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」

スライドには、アラガミに『捕食』され死体も残らず消えていく人間の写真が写されていた……機動六課のスターズ・ライトニング分隊の皆様方は、あまり見ない濃密な『生き死に』に唖然としているのだ

「じゃんじゃん行くよ。神機を扱う者、通称『ゴットイーター』には、アラガミに対抗する為に自身の体内にオラクル細胞を取り込んでいる……まあ、『偏食因子』って言う、予防策も取られてからだけどね。」

「この技術が確立するまで、約５万人以上の実験体となった者達は犠牲になった。」

「それって、お前も入っているのか？　アマノ？」

シグナムが、挙手をしてから質問する……豊的には授業に関係無い為、答えたくないが秋永がうるさく《フラグだ！　フラグがたった！！》とうるさく、語外に言えとうるさいので答えることにした

「まあ、一応偏食因子の調整に関わっていたかな？」

「そう…か…ありがとう、無粋な事を聞いたな。すまない。」

「はいはい、話続けるよ！！　ゴットイーターについては、前に豊が話しているから割愛するけど、問題はオラクル細胞の方だからな。」

二人にフラグが立ったかそうかと自己完結し、秋永は話を続けるためにパンパンと手を叩いている……顔にはイラつきも見て取れる

「問題は、何故このような『非生命体臭い細胞』が生まれたかが今作品の裏テーマなんだよ。」

「いきなり、メタな話だな……」

「るさい、問題はこの細胞が『人為的災害』なのか、より大きな……それこそ、『星のような大きな存在』が『何らかの目的』で生み出した物なのかだ。」

「それって、まるで星に意思があるような……まさか。」

豊の発言をスルーし、秋永は更に話を続ける……ティアナは、その問題である事に気がつく……これ、最初の引き合いに繋がっているのではと

「そう、星もまた一つの生き物なら、人間がウィルスに対して抗体を持つように、何らかの抗体のようなものを持っているはずだよね？」

「でも、それなら一体何がウィルスなんですか？」

そう、その説を証明するなら、ウィルスのような外敵が必要なのだ……星という途方も無い大きな存在を脅かす存在ほどの

秋永も、乗ってきたのか劇を演じるように説を述べる

「そうだね……二つ程説を考えているんだが、有力株はやはり『人間』だろうね。　作中ではあまり語られて無いけど、ミッドチルダでも都市を放棄する必要があるほど大きな犯罪が起きるそうじゃないか？　そんな面倒くさい害悪にしかなら無い存在を何故生かしておく必要がある？　豊の居た世界の様に、死滅寸前の『黒い星』にしかねない存在を何故？」

単純な環境問題なら、確かに反論は出来たかもしれない……これはあくまでも人間個人の『道徳的問題』なのだ

都市を汚し、その穢れを他に押し付けるのは人類の癖で性のようだ

秋永はさらに話を続ける

「もし、オラクル細胞が、人間で言うところの抗体なら、彼らは人間を外敵を認識して行動しているのだろう……だが、それには些か全滅のスピードが遅く無いかい？　なあ、豊？」

「……だろうな。」

秋永の問いに、肯定を返す豊……

「まるで『成長』を待っている様な長い襲撃インターバル、管理局員の犠牲もそんなに出ていない……もうわかったかな？　ここで第二の仮説だ。」

その台詞に合わせたように、スライドが動く……そこには、地球のような星の外に黒い何かがウヨウヨと動いている絵だった

「『外敵来訪説』……中に外敵が入ってくる前に、中の構造を強化しているんだろう……って説だ。人間で例えるなら、予防注射みたいなものかな？」

「つまり、その予防注射に豊さんの世界は滅びかけているんですか？」

幼女の一言がよほど堪えたのか、豊は放心していた……情け無い話だが、秋永の話が正しければ、予防注射で人類は滅菌同然の状態まで追い込まれているのだ……流石の豊も情け無いのか、展開した相棒のスサノオと一緒に落ち込んでいた

スサノオは微かに赤いのは気のせいだろうか？　秋永は、冷や汗流しながら、〆る為に言葉を紡ぐ

「うぉっほん、要するに豊の世界同様、本小説は『外敵来訪説』で通すからよろしく。二時間目は、『外敵』について授業します。」

無理やり〆たな～と、反省しながらミーティングルームから出て行く……今頃、豊は誰かにドンマイと慰められているか、ネチョられているだろうとか最悪な事を考えながら

第十三喰　探索と来訪（前書き）

最後に、大事なお知らせを追加……あうあうあう……

第十三喰　探索と来訪

機動六課で不本意ながら、ドッタンバッタンと波瀾万丈の生活をしているユタカの元に、一通の招待状と手紙が送られて来た

差出人は、カリム・グラシア……ユタカの保護者みたい（身元保証人に近い）な人からであった

『このパーティに、私の代わりに出席して下さい。　まあ、最終的には貴方の判断に任せますが。』

「これ、七割方脅しで残りは放棄だろう……たく、しゃあねぇな。」

招待状には、行くという返事でだす豊……彼は、意外とマメな性格なのだ

第十三喰　招待

豊は、教会の命でどこかに長期出張しており、機動六課には居ないあの近接狂が居ないと、シグナムとまともに相手にしてくれる人物が減る……書類整理に製作、シグナムの組み手や将棋相手など、意外と多様な彼の存在を痛感させられた機動六課だった

―――

海鳴市……自分が知る地球の過去の世界、だが、何かが明らかに違った

その違いについて、町並をブラブラしていた豊は考えていた……黒い膨らんだズボンに、へそ出しの黒い服装

よくわからない人は、ナイトメアコートにダスキーモッズを想像してくれ

「（意志が明確に感じられないな……やっぱり、平行世界なのかな？）」

ガイドブック片手に、彼は海鳴市を闊歩していたのは、彼の上司に当たる人物……『カリム・グラシア』の依頼があったからだ

内容は、機動六課に先行して海鳴市に漂着したロストロギアの探索と封印

豊が先行したのは、彼が聖王教会所属であり、単独の方が早くに行動が始められるからだ

「（幸い、奴隷や連中をおおっぴらに信仰している連中は居ないみたいだし、アラガミも見当たらないな。）」

大気の乱れ、オラクル細胞の異常収束も見られない……足で探せる場所は足で捜し、駄目なら後から来る筈の機動六課組（隊長陣の休暇が局の狙いらしい）と合流して再捜索だ

「お昼とかどうしよ……」

目下最大の問題は、『寝泊まりするところが無い』のである……迂闊だった

金銭的問題は無いが、経済的にあまり使っていいものでも無い
グダグダと考えていると、人とぶつかってしまった

「きゃっ？！」

「あ、す、スイマセン……大丈夫ですか？」

何、当たり障り無い普通な謝り方してんだと自分を叱責しながら、女性に手を伸ばす
女性は紫かかった黒髪に、少し白よりの肌……まるで、物語に出て来るお姫様みたいに綺麗だった

「大丈夫ですか？　どこか打ったところは？」

「いえ、大丈夫なので……それじゃ。」

その人は、何かに怯えるように去っていた……まさか、あの人は感のいい人なのかもしれない
たまにいるのだが、人の本質を直感で見抜く人がいる……それ自体に問題はないが、俺みたいなゴッドイーターの本質はキモい以外無い
かつて、同じ部隊の仲間達で表すなら……コウタがひょうきんな癖して家族思い、アリサはなんかの茨？に絡まれていて、ソーマは何かに憎悪と親愛を抱いていたな……俺？俺は内緒だよ
つまり……

「こ、告白する前にフラれた……」

こんな心境なのだ……彼女は、普通じゃないのは、美人以外にあるようだが、まあどうでもいい

【ケケケ……もう、フラれたな？】

「るせぇ、久々に台詞吐くなら、もっとマシな台詞吐けよ。」

俺、久々の登場……しるか、そんなメタな発言をしまくる二人は、暗くなりそうな海鳴を歩き回る

幸い、１８歳の姿故に、補導もなく、平和に一晩過ごした

◇大変なお知らせ◇

なんとね……この小説のプロットをこの回までの奴を間違って消しちゃったんだ……マジ大惨事だよ。

全く、おかげでキ〇ガイスカさんしか思い出せ無い珍事態になってしまいました

主人公の武器とかは決まっているのですが、誰をどう動かすかがどうしても思い出せません。

現在、脳内フォルダを漁って、プロットを再構築中ですが、暫く更新出来ないよっ（；◇；

重要？……につき、活動報告にではなくこちらに書きました。

アクセス件数見たら洒落にならない人数でドン引きです（放置してた自分に）。

意外にも絡ませづらい（汚染的意味合いで）ＧＥキャラ……普通の人に触れたら、間違って補食とか洒落にならなさそうだよね。

まあ、何故にこんな事をわざわざ書いているかというと、多分活動報告とかお気に入りユーザー登録した人くらいしか見ないだろうから、こっちに書いているわけです。

ゴッドイーターの次回作が出るらしいので書くなら、読み切りでくだらないほのぼのギャグでも書こうと言う心算です。いいよね、学園まったりギャグって。

アペンディスク版が約２１００円と聞いて喜んでいるだけですが何か？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7228j/

ＧｏｄＥａｔｅｒＳｔｒｉｋｅｒｓ

2010年10月8日23時11分発行